

関口泰の政治評論(上)

今井清一

はじめに

- 1 関口泰と『社会及国家』
 - 2 憲政論、議会改革論と植民論(以上本号)
 - 3 普選実施をめぐる
 - 4 一九三〇年代の政治評論
- 附 『社会及国家』所載関口泰論又・時評・随筆一覧(本号)

はじめに

本学の初代学長として昭和二五(一九五〇)年から二七年まで在職した関口泰(明二二―一八八九―昭三一―一九五六)は、大正末期から昭和一〇年代にかけて、『東京朝日新聞』の論説委員、一時は政治部長として、するどい政治批判の筆陣を張ったことで知られている。しかし関口の文筆活動が開始されたのは、これよりもはるかに早い。すなわち大正三(一九一四)年に一匡社の社員、今日風にいえば同人となり、その機関誌『社会及国家』に論文・時評・随筆・通信などをひんばんに掲載している。『社会及国家』は関東大震災後にしばらく中断した模様であるが、そ

の後再興され、戦時体制下に言論統制・出版統制の強化される昭和一六（一九四一）年三月に終刊するまで、二九六号にわたって続いた。同人雑誌で、しかもすぐれた水準を維持しながら、これだけ長くつづいている例は稀である。この間を通じて、関口はもっとも熱心な社員の一人であり、またもっとも長期間にわたって多面的な執筆活動をつづけた寄稿家でもあった。

関口にとって、『社会及国家』は、朝日新聞入社後も思うところを心おきなく書ける絶好の執筆舞台だったようである。同誌一三〇号（昭二・二、以下誌名を略して号数と発行年月とをしめす）の「政界年の暮」には、「普通の雑誌だと、十一月頃から、新年らしい題目で書かなければならぬところを、新年になってから出ようという新年号に、政界年の暮などと題して、旧年中の物語りを、心おきなく書ける所が、此の雑誌の有難味だと、つくづく思う」（引用は新かなづかいに改めた、以下同じ）と書いている。関口ばかりでなく、他の寄稿者にとっても、この雑誌は、思うことをずばずば言えるばかりでなく、おたがいに理解しある仲間に、思うことの委曲を心おきなく伝えられる執筆舞台として尊重されたようである。たとえば東京朝日新聞社での関口の後進で、関口とともに昭和九（一九三四）年から五年間ほど同誌に時評を執筆した尾崎秀実の文章にも、そうした感じがつよく現われている。満州事変以降、言論弾圧がきびしくなるなかで、いっそうそういう感じをつよめたのであろう。

関口はまたその代表的な政治評論集である『普選と新興階級』（昭二・一〇、日本評論社刊）の序文で、「中央公論、改造、我観、雄弁などに掲げたものの外、大部分は一匡社発行の雑誌『社会及国家』から輯録した」としているように、この雑誌への寄稿は数多く、しかも山の随筆や考証までふくめてきわめて多方面にわたっている。それには関口泰の署名のほか、瀬名黙太郎、黙太郎、黙、それにST生のペンネームが用いられており、同じ号に署名を使いわけて時評・論文・随筆をあわせ載せていることも少くない。同誌は、後述のように官吏や銀行・会社員の同人が多

いたためか、ペンネームの寄稿が多く、執筆者の確定は容易でないが、少くともこれだけはたしかに関口のものとみられる。

このペンネームにもふれて、朝日新聞社での後進の西島芳二は、関口の遺稿集である『関口泰文集』のあとがきで、関口のことをつぎのように評している。

「先生は黙山と号し、黙太郎などとペンネームを使われたように、おしゃべりの方は余りお得意ではなかったが、筆を走らせる方は実に早かった。何か思いついた論文を書かれるときは、早朝五時頃から書きはじめ、朝飯前に終るという調子だった。一たん筆をとられると、日頃頭の中で考えぬかれたものが、堰を切る勢いでほとばしり出て、滾々としてつきない感があつた。これが政治はもちろん、憲法、法律、地方制度、教育、文化など広範な部門に亘っているのだから、先生の書かれた評論の数が多いことも当然のことといえよう。⁽¹⁾」

このペンネームはまた、やはり朝日新聞社の同僚、笠信太郎のつぎの回想を想起させる。

「関口さんはよく言われた。新聞の編集記者は流れに沿って動かないことには記事はとれない。しかし社論を書くものは、この流れを迎え討つ構えでいなくてはならぬ。これが違いだ。そういう構えから、勢い批判をするものはみだりに人に会うのは考えものだ、といったこともよく言われた。関口さん自身、政治家や軍人を広く知ってはおられたが、事あるごとにそれらの人と会って話をするようなことをされなかった。」

「関口さんの文章は独特であつた。(中略) 気品がありながらよく相手の胸にザクリと衝きさすものがあつた。私どもはこれを関口さんの『くさり鎌』とよくいった。この関口流のくさり鎌は、事件をめぐる相手方をひどく狼狽させたものであつた。⁽²⁾」

ところで『社会及国家』は、まとまって保存されていない。文部省大学学術局監修『学術雑誌綜合目録・人文科学

和文編』（昭34）でみると、いちばん多く所蔵しているのは京都大学経済学部図書館であるが、ここでも約八〇号が欠号であり、国会図書館はさらに欠号が多い。関口家にもかなりたくさん保存されているが、やはり欠号はある。そこで関口家をはじめ国会図書館、京都大学経済学部図書館、一橋大学図書館、法政大学図書館の分をあわせて、若干の欠号をのこして、ひととおり同誌に目を通し、関口泰の寄稿した論文時評・随筆の目録を作成することができた。これは本号の終りにのせる。未見の分はそこにも付記したが、大正七（一九一八）年の六号分と関東大震災後の十二号分、これに昭和二（一九二七）年の二号分とで、いずれも関口の執筆活動が旺盛だったと予想される時期のものである。きわめて残念であるが、他日を期したい。

註(1) 『関口泰文集』（昭33・9 関口泰文集刊行会、関口隆克発行）三五四ページ

(2) 笠信太郎『関口さんを想う』前掲書IV—Vページ

一、関口泰と『社会及国家』

まず最初に関口泰の経歴を『社会及国家』と関連させて、ごく簡単に見ておこう。

関口泰は、関口隆正と操子の長男として明治二二（一八八九）年三月に静岡市に生まれた。祖父の隆吉は、旧幕臣で大橋訥庵の門に学び、山岡鉄太郎らと精銳隊に加わり、江戸市中の巡邏にあたったこともあるが、明治維新後は元老院議員等を歴任し、当時静岡県知事であった。隆吉には、国語学者の新村出、浜松高等工業の初代校長の関口壮吉、東京天文台長となった関口鯉吉らの実子があるが、まだ子供たちの幼ないときに長女の操子に婿養子をとった。それが泰の父の隆正である。

隆正は、安政三（一八五六）年に江戸の学者清水礫州の末子として生れた。大橋訥庵の甥にあたる。安井息軒、岡松邇谷らに学び、ついで司法省法学校生徒となり、これを免ぜられたのち、関口隆吉の養子となった。彼は明治一七

(一八八四)年に隆吉のすすめで、上海に遊学したことがあり、その後、藩閥政府を批判してほとんど官途につかずみずからその墓碑銘に「磊落不羈。以俠儒自任。再從軍于滿洲。一奉職于台灣。終不得其志也」と撰したという。⁽²⁾泰は夢界と号した父隆正のために『夢界遺文』を編んでいる。

東京朝日新聞の後進で関口に師事した須田禎一は、「ペンを自由を支えた人々」のひとりとしてその略伝をしっているが、そのなかで「母方の祖母の出た中村家は代々茶道の家柄で、『言問団子』の植木屋などともつきあいがあり、下町色が濃かった。関口は後年母操のことを『色彩感覚のすぐれた、小紋のよく似合うひと』と語っている」と書き、さらに関口が一高時代の校長の新渡戸稲造に影響をうけたことにもふれて、「旧幕臣的な反骨と、近代的な合理思想と、江戸文人的な繊細な美意識とによって、リベラリスト関口の精神の基盤が形成された、と見る事ができるよう」と評している。⁽³⁾

関口家は、その老大ないとこ会で有名であるが、⁽⁴⁾泰も父、祖父ならびに関口家のことに関心をよせ『社会及国家』にも寄稿している。すなわち「大久保内務卿の手簡」(二六四号、昭13・4)「反古の中から」(二六五号、昭13・5)などでは祖父隆吉のことを語り、また「関口氏の研究」(二八五号、昭15・1)「関口氏の研究続編」(二九七号、昭16・4)をものせている。これによれば、関口家は駿河今川氏の一門である。関口家八世の氏縁は今川義忠の女を母とし義元の従兄弟にあたり、やがて桶狭間の戦で討死することになるが、氏縁はやはり今川氏の一族である瀨名氏貞の子氏広(一名義広)を養子とした。氏広の女は当時今川家の人質となっていた徳川家康に嫁し、長男信康と長女亀姫を生んだ。いわゆる築山殿である。だが氏広は家康が今川家と絶縁したさいに義元の子今川氏真に殺され、また織田信長の女徳姫と結婚した信康も、やがて信長の要求で築山殿とともに家康によって殺されるという悲運にあった。関口家は、氏広の子または孫が出家して駒込の禪利徳源院を建てた、その後裔だという。

泰は、麴町区富士見小学校、東京開成中学校、第一高等学校一部英法科をへて、大正三年七月に東京帝国大学法科大学政治学科英法兼修科を卒業した。関口と同年の明治二二（一八八九）年生れの思想家には、南原繁、和辻哲郎、柳宗悦らがいるが、南原とは東大法科政治学科の同窓生であった。大正二年に文官高等試験に合格していた関口は、同三年八月に台湾総督府にはいつて土木部勤務の属官となり、五年の春に台湾総督府事務官となった。当時の帝大卒業者はほとんどが、官吏となるか、でなければ財閥本社にはいるのが、通例であった。また第一次世界大戦後の学制改革以降のように、学界への道は広く開かれてはいなかった。さらにまた明治四二（一九〇九）年に東大法科を出た鈴木文治が新聞記者を志望するというと、学部長の穂積八束がおどろいたという逸話のあるように、ジャーナリストの地位はまだ低く評価されていた。やがて、第一次大戦後に東大にもどって教授となる人びとも、ほとんどがいったん官界にすすんでいる。同窓の南原は内務省に、一年上の法科経済学科の大内兵衛は大蔵省、一年下の法科の田中耕太郎は内務省、おなじく政治学科の河合栄治郎は農商務省、三年下の矢内原忠雄は住友総本社という具合である。関口はのちに新聞記者を志したのには「父が漢学者の家に生れて文章報国の志を懷き、静岡で今の民友新聞の前身の創立に関係したこと」などが影響しているが、「母は父が明治二十年頃にした新聞事業の失敗の苦い経験があるし、その頃の新聞人の性格にも生活にも快い感じをもっている筈はなかったので、一人息子が又その泥海に入ってゆくのを喜ばなかったのも無理ではなかった。そこで親孝行のつもりでまず役人になった」としている。⁽⁶⁾

関口の大学卒業に先立つ大正二（一九一三）年九月には、一匡社が機関誌として『社会及国家』を発刊した。創刊号の巻頭には、つぎのような一匡社の宣言がかかげられている。

一、吾等ハ国民ノ国家的及社会的活動ノ正当ノ範圍ヲ探求シ、主張シ実行セム事ヲ期ス
一、斯ノ如クニシテ吾等ハ国運ノ振興ニ努力シ国民特ニ青年ノ志氣ヲ鼓舞セム事ヲ期ス

別規では、この目的遂行の方法として、「毎月一回研究会を開き、特定の事項に関する社員研究の結果を報告し之が討議を行い、以て社会及国家に関する諸般の問題の解決を図る」「毎月一回雑誌『社会及国家』を発行し、広く社会に一匡社社員の主張並に研究の結果を発表するの機関たらしむ」とある。

発刊当時に誌上で活躍しているメンバーには、内閣法制局の金森徳次郎、大蔵省の津島寿一、外務省の藤井啓之助、鉄道省の伊沢道雄、朝鮮銀行の岸巖、横浜正金銀行の君島一郎、弁護士之行森昇、東京帝大医科の額田晋、杉田直樹それに瀬戸方堂、森川端夫、泉精太郎らがあり、谷崎潤一郎も社友として隨筆を寄せている。ところで、ここにあげたメンバーのうち杉田までは、いずれも明治四五〓大正元年の東京帝大の法科または医科大学の卒業者である。一匡社の初期の社員は、全体的にみると、この年度から関口の卒業した大正三年度までの東京帝大の法科、医科、工科の卒業者が大半を占めている。なかでも明治四一年に第一高等学校の英法科を卒業した者が多く、谷崎もそのひとりである。こうみてくると、初期の社員の多くは、日露戦争後の思想的転換期に旧制高等学校の生活をはじめた世代であり、大学卒業後は官庁、銀行、病院等での実務にたずさわっているが、同時にそこでの実務に没頭することにはあきならず、自己の学識への抱負から、社会的な発言の機会をもとめていた人びとということになる。

こうした社員の立場は、一匡社同人の発刊の辞のなかにも表われている。これは「信仰の自由と言論の自由とは、現代文明が齎したる二大福音なり」と説きおこし、現代文明の特色は覚醒した個人の生活の自由な拡充にあるが、それはまた生存の根底を不安におとし入れるものであつて、たえずみずからの立脚点を明かにする必要に迫られていると主張する。そして「日本国民の最近の思潮」についても、「公人的自覚の萌芽を認め」ることを喜びながらも、「生活力の発達旺盛なる時は反面に生活力破壊の危機を蔵する時也。今の日本は、新人濶歩の時代なると共に、実に又デマゴグ横行の時代也」と批評する。そして一国の元気を代表する青年の活動範圍が狭められつつあるのを坐視で

きないとして、責年に残されたもっとも広濶自由の範囲である「言論の天地」の一廓を拠守することを主張する一方、デマゴグに対処して「国民の国家的及社会的活動の正当の範囲」を探索することを、その任務として宣言している。そこには新しい思潮の動きを歓迎しながらも、これを先導する言論界の情況にあきたらず、これにたいして自己の主張をしめそうと腕をむずむずさせている帝大出の青年たちの技癢が感じられる。

関口は大学を卒業するとすぐに一匡社にはいった。『社会及国家』三卷二号（大3・8）の社報は、関口法学士が君島一郎と藤井啓之助の紹介で入社したことを報じ、「関口社員は近く台湾総督府に勤務の筈」と付記している。『社会及国家』は、最初は一月と七月とに巻数を改めていたが、やがて数え方がかわり、七卷五号（大6・1）のつぎを四二号（大6・2）として、以下通し号数で呼ばれることになる。

関口の一匡社入社と時を同じうして、第一次世界大戦が勃発し、日本は英仏側に加わってドイツに宣戦した。これまでも『社会及国家』には、海外の政治経済社会事情の紹介が少くなかったが、これ以後は杉田直樹「独逸落ち」（三卷六号—四卷三号、大3・12—4・3）をはじめ交戦国の政治経済政策や社会事情に関するものが激増する。六卷二号（大5・2）は欧州から帰朝したばかりの津島寿一の「戦時に於ける欧州近況」という講演速記で全紙をふさいでいる。在外ならびに在植民地の社員の多いのも一匡社の特色で、大正八年八月現在の社員名簿では、在京社員四四名、地方社員一八名、うち在植民地八名、在外社員六名となっている。

関口が『社会及国家』にはじめて寄稿したのは、三卷六号（大3・12）の「縦横言」欄にのせた「戦後思潮變動に対する準備」である。ここで関口は、世界大戦が「人類の思潮の大動揺」をもたらしたことを重視し、ひるがえって「万世一系の国体と忠君愛国の国民」ですべてを説明し、「『やれやれ』と兵を動かし『青島陥落万才』で万事が解決する」という、思想の涸渇した日本の状況を批判し、大戦後の思潮變動に対処するには「精神の革命に対すべき自

己の確立」が必要だとする。そこには、さきに引いた発刊の辞と相通ずるものがある。そこで関口は「忠君愛国の叫びに凡てを圧倒してしまわないで、静かに、音も微かに而も力強く流れている、真面目なる青年の思想の傾向を察したい。一派の人々からは毛虫の様に嫌われてるといふ雑誌白樺を自分は愛読している。…遂に非戦論者なき国としていられるのであろうか。万歳の声に送り出さるる犠牲をより貴く評価する時がすぐに来るのではないか」と人道主義の叫びをあげ、精神界の天才の出現を呼びもとめている。ここに関口の立場が端的にしめされている。

関口は六巻四号（大5・4）に黙太郎の署名で「台北より」の通信を送り、そのなかで「海外発展或は植民と憲政之が我國の当面の大問題だと思います」（円点原文）と書いているが、このころの関口の評論はこの二つの問題に集中している。五巻二号（大4・8）同三号（大4・9）同六号（大4・12）と六巻四号には黙太郎の署名で台湾統治の実状を報じた台北からの通信がのり、六巻四号には関口泰の署名の「憲政と民意」が併載されている。

大正六年には政治評論の執筆もはじまる。これらの内容については、あとでまとめて論じたい。

大正七年にはいると、関口の執筆活動は俄然活潑となる。五三号（大7・3）では在台湾S生として「社員諸兄」にあてて「此頃の雑誌のページ数の少ないのは兎に角、少し高踏的遊戲的というか時事に対して冷静な眼を向けてる様に見えます」「もっと直接に時世に触れた問題をとらえて、我々若い者の抱懐するところを世に問い、共鳴の音をきき度いものです。いつ迄も七八十の老人の願便に甘んじ、五十過ぎの少壮政治家のわからぬ討論を傾聴していいでもいいでしょう」と通信を送った。そしてこの言葉をみずから実践するかのように、関口泰、瀬名黙太郎、ST生の署名を使いわけて、時評、論文を続々とのせた。大正七年分は欠号が多いが、閲覧できた分のほとんど毎号に複数の時論・論文がのっている。そこには瀬名黙太郎「若き国民と老いたる政治家」（五三号、大7・3）に代表されるように、寺内内閣とあわせて尾崎行雄、大養毅らの旧政党政治家を批判し、関口泰「官吏と言論の自由」（五六号

大7・6)などで知識階級の言論活動を活潑にする必要を説くとともに、ST生「下級官吏の救済」(五三三)などで都市小市民にたいする社会政策の必要を力説している。翌八年になると、講和問題ととりわけ三・一運動にからんで朝鮮統治問題に関心が向けられる。また関口の活潑な時評活動に政友会臭がつよいとして、鎌田六山人ならびに小村俊三から批判され、関口がこれに論駁したこともある(六七号、大8・5—七一号、大8・11)

関口は台湾総督府では大正七年九月に臨時工部庶務課長となっていたが、八年六月に退職して、大阪朝日新聞社に編輯局論説班員として入社し、その後組織変更によって調査部に所属した。大正九年になると関口の執筆は急激に減るが、その年六月になると、関口は大阪朝日新聞社をいったん退社して、翌一〇年三月に渡欧の旅にのぼった。

関口が朝日入社にふみきつたのには、台湾に来ていた母が亡くなって心配をかける人がなくなり、父のほうはむしろ心中で賛成していたという事情がある。このころのことは彼自身がくわしく物語っており、関口についても、当時の新聞のことについても参考になるので、長文にわたるが引用しておこう。

「その当時は無論入社試験はない。それに、寺内内閣と闘った例の事件によって、鳥居素川をはじめ、長谷川如是閑や大山郁夫の諸氏が退社したあとで、大阪の論説は殆ど東京から加勢に來た緒方竹虎君一人で書いている有様、論説陣強化というより補充の必要から、新に論説班を作って建直そうというので、今の上野社長が誰か若い者を探しているということを、弁護士をやっている私の友人に話があった。それだけがきっかけであったのである。それで内藤湖南博士はまだ朝日新聞に関係をもっていた時分であったし、支那学の関係で父も知っており、叔父の新村出博士が、京都帝大で同僚ということで、先づ内藤博士を訪い、その紹介状をもって、当時の編輯局長西村天因博士に遇った。なにか書いたものがあるならもって来いといわれたので、大学を出る時分からずとやっている同人雑誌、今日でも続いている『社会及国家』を一とかえ持ちこんだものである。それを審査したのが、主筆や、今も大阪にいる春山武松君である。天因博士は、文章は余り巧くないが、いろいろのことを知ってるようだから

よからうということになって、入社をゆるされた。話が四月に始まって、五月に入社だから、今と比べものならぬスピード入社である。そしていきなり社説を書かされたから、新聞記者修業を疎かにしない特権階級視されて、なにもしないで高給を食むという反対は相当社内が強かったとは後で知り、後になれば尤も至極だと思ふのだが、実の処は余り高給を頂戴していたわけではなく、初めはその時役人として受けていた給与を標準とした給料の約束だったのだが、いよいよ入社ときまったという西村編輯局長の御手紙に、給料の儀は他との権衡も有之というので二割引になっていたから、これは無茶だと驚いたが、もう入社ときめていたから、そのまま承諾した。そんな風で給料の方は決して特権階級ではなかったが、勤務の方は、慥かに特権階級に違いなかった。(中略)

その間にどんな社説を書いていたか今は忘れてしまったが、京都から大阪へ通う汽車の中で、紳士達が話している意見は朝日か毎日の社説の範囲を出ていない。このことは東京の社説を書く時に、役所目当てや専門当局を頭の中に置いて書くのとは、大變違ふところであつて、社説の影響が逆に社説の性質を決定していることを考えさせられる。ただ覚えてゐるのは、入社して最初に書いたのが師範教育の事で、これに対しては当時御影師範かなにかの校長をやめたばかりの野口援太郎氏が、五回に互る反駁を送られ、これも紙上に出したことで、昇格問題で中橋文相が大阪駅につくと、押しかけた学生に大阪朝日の社説に書いてある通りだといったことだ。これは専門学校の特色と大学昇格の非を論じたものであつた。当時は夕刊に十行位の短い評論をのせていたので、たしか松井須磨子の死なども取扱つたことがあつた様だ。論説班は六七人で毎週一回平均長いのを書き、短かいのを我々二、三人が受持つていたように思う。

こんな風で我儘な勤務をしていたわけだが、一年たった時分に、誰もがよく経験する幻滅時代、倦怠時代がやって来た。そこへ一寸した事件が継起したので、嫌気がさして辞表を提出して、乱暴な話だが辞意を聴届けられるのも待たずに、その当時創始まだ日の浅い日向の新しい村から、かねていつて見たいと思つていた琉球を通じて台湾にゆき、台湾から広東へいつて、当時の陳炯明に遇い、其後ロシヤへいつた陳独秀や、胡漢民などと遇つた。ちやうど朱執臣の葬儀に列したが、葬儀委員長の胡漢民氏

が腦貧血を起して倒れたのを、孫逸仙が出ていって手当をしているのに、日本人がガヤガヤ手を出し口を出している。孫先生はお医者さんだから大丈夫ですと誰かがいたので、日本人側はやっと手をひいて顧みて苦笑していたが、これが当時の日支關係のなにかを暗示しているようで、一寸気はづかしく思ったことなどを思い出す。

北京へいったのはその翌年の正月であったが、上海から漢口まで溯り、九江から廬山へ登ったりした。その三月末にヨーロッパへ出かけたのであるが、その間も國際労働會議の通信を送ったりしており、支那でも朝日の特派員に世話になり、自他共に實質的には朝日社員として怪しまぬ位のものであったから、その間に下村副社長が入社して、アメリカからヨーロッパに來たのをベルリンで迎えた際、再入社の話が出た。⁽⁸⁾

関口はヨーロッパでは、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、スイスの各国を視察し、ジュネーヴでは第二回國際連盟總會と第三回國際労働會議を參觀した。ジュネーヴからは「日本労働組合の國際加盟」(九六号、大11・5)を寄稿し、日本の労働代表の資格問題にかんする議事を報じている。國際連盟、國際労働會議の事務局にいたる大沢章、藤沢親雄、浅利順四郎らとも交流し、社報に「社員紹介の常習犯こちらへ來ても改心出來ず、又大いに紹介し度いと思つてますが、どうでしょう。十人位ここに居る若い人を入れて歐羅巴支部を作ろうと思うのですが、如何ですか」(九三号、大11・2)と書き送っている。大正十一年六月には、上述のように大阪朝日新聞社に再入社して歐洲留学生となり、もう一度第四回國際労働會議を參觀して同年一二月に帰国した。この時期の『東京朝日新聞』にも、國際労働會議に關連した関口の評論が散見する。「労働條約の未批准」(大11・7・24、26)などである。

この間『社会及國家』には、以前に書かれたと思われる山の隨筆「赤城日記より」(九八号、大11・7)「燧ヶ嶽の初秋」(一〇二号、大11・11)などがのせられている。関口は若い時から山あるきを好み、しかもあまり人のいない山をあるいていた。とりわけ赤城山や尾瀬沼を好み、赤城には勉強小屋をもっていた。「燧ヶ嶽の初秋」は「関口

泰文集』には「尾瀬の初秋」の題で収録されているが、それには「私が此処（尾瀬ヶ平）に來たのは、明治四十四年の秋の初であった。若松の方から、南会津の街道を田島、山口と経て、檜枝岐へ宿ったのは九月二日、その翌日午後五時頃に此漁小屋に辿り付いたのである」としるされている。

関口は大正一年の暮れに帰国してすぐ、翌一二年一月に東京通信部勤務となり、ついで六月には東京朝日新聞社に転じ、政治部員となった。ついで調査課長をへて、一三年四月に調査部長となり。一五年八月に編集局勤務兼論説委員となった。ここでまた須田の本をかりると、「『東朝』では米田実が論説委員長だったが、関口は自分よりやや年長の論説委員前田多門と親交を結んだ。また政治部長をしておりまもなく編集局長となった緒方竹虎とも親しくなり、緒方を通じて『信毎』主筆の風見章とも知り合った」とある。⁽⁹⁾ 関口が東京に移ったことによって、『社会及国家』誌上での執筆活動は活発となった。

ところで関口は、渡欧に先立って『民衆の立場より見たる憲法論』を脱稿し、これは大正一〇年八月に一匡社から刊行され、『社会及国家』の代りに社員に配付された（八九号と九〇号のあいだ）。これについては、山之内一郎が『国家学会雑誌』（第三五卷一〇号）で紹介している。本書は憲法と政治の実際の関係については、比較的平易かつ明瞭に書けているが、憲法自体を論ずるには「民衆の立場から見てもどの立場から見ても敢て変りのあるものではない」、本書の自由主義的な憲法解釈は、理論上および法典上の根拠が不十分で、自由権の拡張解釈や普選の提唱など憲法制度の批判は、政治論・立法論としても現実離れしているのではないか、というのが、その骨子であった。⁽¹⁰⁾

だが当時渡欧中の関口は、この批判をいわば軽く受け流している。「私はあの書を書いた時には決して学問的の批判を期待していませんでした。小学校の先生や、地方の青年団の人に読んで貰い度いと思って書き初めたのです。然し思っていた程平易に通俗的に書けなかったのは遺憾でした。それを書いたのは今の普通教育は余りに政治の智識

が縁遠いのを遺憾に思い、且つ普通選挙論者である私は、立憲教育の必要を切実に感じていたからです。(中略)枢密院の改造、府県知事の公選、一院制への傾向、陸海軍大臣が武官でなければいけない事は政党政治に対して制度上の邪魔をなしている事を、特に山之内さんが上げて批判して下さったのは、私が此の書を書いた意味をよく認めて下さった親切な読み方として感謝の意を表したいのです。又わざわざ目次をあげて私の本の組立ての特長を示して下さいた事もお礼をいわなければなりません」(九三号、大11・2)。

大正一二年三月には『社会及国家』は特別号として『如何にして議會を改革すべきか―即時に具体的に合理的に有効に』を発行した。帰国後間もない関口もその分担執筆にあたった。関口の分担分は明かにされていないが、のち『普選と新興勢力』に採録したものから見て、少くとも前論は執筆したようである。なおこれと前後して一匡社からは『貴族院改革と貴族制度の研究』と題した同様のパンフレットが刊行され、関口もこの一部を分担執筆し、のちにこれを前掲書に採録している。このパンフレットは未見であるが、貴族院事務局『貴族院ニ関スル諸論概要録』によれば、大正一三年六月一〇日発行で、前論・貴族院改革問題の経過と其の現状、第一編・貴族院改革問題、第二編・貴族制度の研究となっている。関口が執筆しているのは第一編である。

一〇六号(大12・4)以降、関口は毎号に論説ならびに時評を寄せるかたわら、イタリーで見た美術の紹介や「万葉集の恋歌」など活潑な執筆活動を展開した。小市民的デモクラシーの開花期ともいふべきこの時期が、関口の執筆意欲を刺激し、これを多彩に伸長させたのだと考えることができよう。

しかし残念なことに、大正一二年九月一日におこった関東大震災は『社会及国家』にも大きな打撃を与えた。同誌も一〇号(大12・8)でいったん中断したらしく、二年半あまりのちになって一二一号(大15・3)が発行されているが、この間の号は、私もまだ見ることができない。そのあとしばらくのあいだも、未見の号が少くない。しかし

さきにふれたパンフレットがこの間に刊行されていることからみても、第二次護憲運動や普通選挙法制定をむかえるこの時期には、一匡社の活動は続いていたものと推察される。

この時期につづく大正末期から昭和初期にかけての関口の執筆活動は旺盛で、しかもこれ以前の時評にくらべるとかなりまとまった政治評論を関口泰の署名でひんばんにのせている。普選の問題、とくに普選による衆議院ならびに地方選挙の実状調査や無産政党の問題がその中心をなしている。この時期に刊行された前掲の『普選と新興階級』は第一編を「普選選挙と新興政治勢力」と題してこれらの問題にあて、第二編を「議會中心政治の確立」と題して、さきに述べた議会改革にかんする論考をおさめている。第三編「地方分権と地租委譲」は、憲法論でもしめされた地方自治にたいする関口の関心をしめし、第四編「人口食糧問題と北海拓植問題」は早くからの植民政策についての関心をひきついでいる。この本によって、さきの時期の『社会及国家』の未見分に所収された関口の評論の若干は補うことができる。だが「苦楳内閣の影薄く」（一二六号、大15・8）とか「怪文書、言論取締其他」（一二七号、大15・10）といったような、この時期に頹廃の色をふかめた既成政党をめぐる、するどくて小気味のよい政界評論のたぐいが、同書に収録されていないのは残念である。

なおここで、一匡社の議会改革の提案のほんの一部が貴衆両院を通過して実現したことについてふれておこう。さきの特別号「如何にして議會を改革するか」は、本論で六項目を提案しているが、その一つに「予算其他の財政問題を慎重審議するに適切なる制度方法を講ぜよ」という項目がある。ここでは、衆議院の予算審査期間が議院法によって三週間に限定されているのに反し、貴族院ではこの制限がなく、しかも会期末に審議するのでこれを政府とのかけひきに利用しうるなど、貴族院のほうが有利な地位を占めていることを批判し、衆議院の予算審査期間を延長することが主張された。ところが、第二次護憲運動後に加藤高明護憲三派内閣による貴族院制度の改革が企図されたさい、

これが貴族院の予算審査期限にも衆議院と同じく三週間の制限をもうけるという形で提案されたのである。これは議院法改正案として第五〇議會（大13・12・26—14・3・30）に政府案として提出され、衆議院では可決されたが、貴族院では院議でこの期間を七日以内延長しうるとの但し書きを附して修正可決した。両院協議会では委員長を出していた衆議院案が敗れ、ここで可決された貴族院案は衆議院が否決して不成立におわった。この改正案は、第五一議會（大14・12・26—15・3・26）と第五二議會（昭1・12・26—2・3・25）には政友会の議員たちによって提出され、両議會とも一匡社員である山口義一が提案説明に立った。第五二議會では、貴族院は、貴衆兩院とも院議をもって審査期間を五日以内延長することができるとの但し書きを附して修正可決し、これが衆議院でも承認されて、ようやく成立のはこびとなったのである。議院法については、歳費値上げなどは別として、議院運営にかんする実質的な改正が成立した例はほとんどなく、第二議會（明38・12・28—39・3・27）で、衆議院の予算審査期間がこれまで一五日以内だったのを二日以内に改めたが唯一の例だったことを考えると、このときの改正はささいなようではあるが、それなりに意義をもっていたと考えることができる。

昭和二年（一九二七）から五年にかけては、関口の著作活動がもっとも油の乗った時代であった。昭和二年二月には、『朝日新聞』紙上に三〇回にわたって連載した『普選講座』（東京・大阪朝日新聞社）に附録を付して刊行し、一〇月には上掲の『普選と新興勢力』を出した。翌三年には『普選から婦選』（昭3・12、ロゴス書院）を刊行した。四年には『朝日常識講座』の5として『労働問題講話』（昭4・2）を執筆刊行した。柳田国男の『都市と農村』、杉村広太郎の『新聞の話』などと同じシリーズである。つづく『第二朝日常識講座』では、9の『公民教育の話』（昭5・5）を担当、執筆した。これは、前田多門の『地方自治の話』などと同じシリーズである。同じ年には朝日新聞社政治経済部記者の手になる『朝日政治経済叢書』が刊行されたが、関口はその8の『労働組合法の話』の編集を担

当している。

関口は昭和五年一月には、東京朝日新聞社政治部長となった。翌六年九月に満州事変、さらに七年一月に上海事変がおこるという急転する情況のなかで、関口は七年四月にベルリン特派員となって赴任し、野村秀雄が政治部長の後任となった。関口は一月に帰国して、ふたたび論説委員となった。こうしためまぐるしい移動は、満州事変以後の軍部ファシズムの抬頭と関連しているのであろう。

満州事変勃発直後の昭和六年一〇月六日付の『東京朝日』の社説に、彼は「軍の自制に俟つ」を書いた。これは『関口泰文集』に収録されているが、そこでは「外部に對する国家の意思は、一つに出でなければならぬ。軍が統帥大権によってその独自の行動を主張するならば、外交大権の尊重とともに、兵政分離の精神に徹底するところがなければならぬ。それが国憲にしたがい、国法を守る皇軍将士の責務である」と書いて⁽⁶⁾いる。関口には風あたりも強かったに違いない。そのうえ関口の派遣されたベルリンでは、右翼勢力が進出しており、その年七月の総選挙でナチスが第一党に進出した。須田は「人なみすぐれて剛直である半面、きわめて繊細な感受性の持ち主でもあった関口、何事でもよいかげんに糊塗することのできぬ関口は、異郷で鬱病に陥ってしまった。益夫人がわざわざ看病のためにベルリンへ赴き、伴なわれて同年帰国した」としている⁽¹²⁾。

『社会及国家』への関口の執筆は、昭和三年末から減りはじめる。四年になると黙太郎または黙の署名の時評が中心となり、かわって教育関係の評論がふえはじめ、これが関口泰の署名で執筆されるようになる。ベルリン特派の直後の一九四号(昭7・4)から二〇五号(昭8・4)までの一年あまりのあいだ、関口の文章は同誌からまったく姿を消す。そして、二〇六号(昭8・5)二〇七号(昭5・6)に「病床の花」「霧は立ちのぼる」と久しぶりにエッセーをのせたのち、つづく二〇八号(昭5・7)に黙の署名で、大阪のゴー・ストップ事件をとりあげた「軍服の濫

用を怒る」をのせたのをはじめとして、政治時評を再開した。

「非常時」の重圧下に言論弾圧が強化されるなかで、『社会及国家』は同人雑誌の利点を生かして「時の話題」欄で活潑な時評活動を展開するが、関口はその中心メンバーとしておもに内政関係を担当し、中国問題の尾崎秀実、国際問題の一城竜彦（小沢正元か）、経済問題の斉藤栄三郎らと健筆をふるうこととなる。この時期の関口の時評は、五・一五事件後のいわゆる中間内閣期の政治の問題点をみごとに衝いていて、円熟さを感じさせる。関口は黙の署名の時評とならんで、天皇機関説問題と関連する憲法論や、選挙粛正とからんでの選挙法の改正問題、それに教育問題などを関口泰の署名で執筆している。

この時期は関口の執筆活動が一つのピークに達したときであり、その評論集として『教育国策の諸問題』（昭10・11、岩波書店刊）と『時局政治学』（昭11・12、中央公論社刊）とが相ついで刊行されている。『社会及国家』にのせた時評も一部はこれらに収録されているが、さきによせた「軍服の濫用を怒る」などの生きのいい時評のたぐいは収められていない。

昭和一二（一九三七）年七月に日中戦争がおこると、関口の時評はまばらになるが、その後も翌一三年一月の二六二号までつづく。そしてこの号を最後に「時の話題」欄が誌上から消え、つぎの二六三号は二・三月合併号として三月に発行されている。この時期はあたかも、山川均、加藤勘十、大森義太郎らが検挙された前年一二月の第一次人民戦線事件につづいて一三年二月一日に大内兵衛ら労働派教授グループが検挙される第二次人民戦線事件がおこったときにあたり、『社会及国家』にも言論弾圧のほこ先が向けられたものと想像される。同誌はこれによって紙面が一変し、現代の問題から一歩しりぞいたエッセーばかりがのせられることになる。

関口もこれ以後は「大久保内務卿の書簡」（二六八号、昭13・4）や「反古の中から」（二六九号、同5）をはじめ

めとする考証ものや、この年歿した旧友梁歩堀井金太郎の回想などをのせている。「大久保内務卿の書簡」は、萩の乱当時に山口県令だった祖父関口隆吉が騒動勃発を報告した電話を録した大久保の書簡にふれたもので、他の考証ものも隆吉と関係したものである。

関口がふたたび時評の筆をとりはじめたのは、独ソ不可侵条約の締結によって平沼内閣が「複雑怪奇」のせりふを残して退陣したのちの二八二号（昭14・10）である。「笹於兎平も旧廬を出づる小春日和、瀬名黙太郎ものこのこと罷出でては見るものの、季はずれの『蛇穴を出づ』であるから、肌寒を覚えればすぐにも引込む、此の冬、幸に老体に暖かなれば穴に入らないで年を越せるかも知れない。於兎平は時の話題ならぬ時評、黙太郎は一人一殺の物騒な語呂を恐れて、一人四冊をかかえる事にしたのである。四冊というのは中央公論、改造、文芸春秋、日本評論の七月号である」。これは同号の「阿部内閣の評判其の他」のまえがきである。関口の時評は三号ほどつづくが、昭和一五年になるとまた考証ものの穴にひそむことをよぎなくされる。そして翌一六年にはいると、新体制の進行にともない自由主義者にたいする執筆禁止など言論統制が強化されるとともに、新聞、雑誌の整理統合など出版統制も進行してゆくなかで、『社会及国家』も関口の「関口氏の研究統編」をのせた二九七号（昭16・3）を最後に廃刊におこまれることとなった。

この間関口は昭和一四年一月に朝日新聞社を退社してその客員となり、ついで一五年には鉄道省嘱託として日本案内記編集にあたり悠々と旅行していた。東亜交通公社の嘱託として中国をも巡遊した。このときは須田が『独絃のペン交響のペン』で述べている。⁽¹³⁾敗戦後には、関口は幣原内閣の文相となった前田多門に請われて教育研修所長兼文部省社会教育局長となったのをはじめ活潑な社会的活動を展開することになるが、ここではふれない。ここで章を改めて、関口の論文、時評を問題別に、また資料として引用を多くして、紹介することとする。

註(1)

隆吉には自由民権運動当時に各地を巡察してつくった『関口元老院議官地方巡察復命書』がある。これには東京府をはじめ神奈川・千葉・茨城・栃木・静岡・岐阜の諸県のものがあり、泰もその一部を復刻している。

(2) 田中正俊「清仏戦争と日本人の中国観」『思想』五一二号(昭42・2)一六三ページ。

(3) いとこ会については、鶴見俊輔他編『日本の百年1新しい開国』(一・三四七ページ)で紹介している。

(4) 須田禎一『ペンの自由を支えるために』(昭46)一一九ページ

(5) 『労働運動二十年』(昭6)二九ページ

(6) 「大学と新聞社」『関口泰文集』一一七ページ

(7) 須田前掲書一一八ページ

(8) 『関口泰文集』一一八一―二一ページ

(9) 須田前掲書一九一―二〇ページ

(10) 『国家学会雑誌』第三五卷第一〇号(大10・10)一四四―一五〇ページ

(11) 『関口泰文集』一一四ページ

(12) 須田前掲書一二二ページ

(13) 須田禎一『独絃のペン交響のペン』三八ページ以下

(14) この時期の活動については『関口泰文集』三六八―七〇ページの年譜参照。著作目録も同書三六五ページにある。ただしこの年譜の一匡社と『社会及国家』にかんする項目は不正確である。

二、憲政論、議会改革論と植民論

関口は『社会及国家』に寄稿をはじめて間もない六卷四号(大5・4)の通信「台北より」に「海外発展或は植民と憲政、之が我国の当面の大問題だと思ひます」と書いたが、大正四年から一二年までの関口の寄稿は、植民論、憲政論ならびにその延長としての議会を中心とする政治制度の改革論が中心をなしている。これに若干の生活改善論や国際労働会議にかんするものが付け加わっている。まずこれをほぼ時代を追って見ることにしよう。

関口が『社会及国家』にまず寄稿したのは、植民の問題であった。関口は上述したように、大正三年七月に東京帝大法学部を卒業するとすぐ台湾総督府に赴任し、台北に居を移していたが、翌四年には三回にわたって「台北雑信」をおくっている。台湾では、明治四〇（一九〇七）年以来、武装蜂起による抗日闘争が数回にわたっておこっているが、この年には台南タバニーで大規模な抗日闘争がおこっている。日本はこれに仮借のない大弾圧をもってむくいた。すなわち臨時法院は約九〇〇名に死刑を宣告し、そのうち一〇〇〇余人が処刑され、あとはおりからの大正天皇の即位式の大赦で減刑された。これがいわゆる西来庵事件とよばれるもので、この苛烈な弾圧については、武者小路実篤、大杉栄、相馬御風、菊池寛らが批判的にとりあげている。この大弾圧によって武装蜂起による反抗はひとまず抑えられることになるが、関口はこうした時期に台湾総督府の官吏としての生活をふみだしたわけである。

関口の最初の「台北雑信」は、編集者の手で「台湾に於ける土民教育」の標題をつけられて五巻二号（大4・8）にのった。これはまず、台湾ではこの種の最初の催しである台湾勸業共進会が明年開かれることになり、「南洋、南支那よりも出品と見物人を集める工夫の由に候」と報じたうえ、「兎に角理蕃事業にて今迄は一切の施設が手控えになり居り、南支南洋に対する何等の施設計画を見ざりし事に候へば」と、この催しの成果に期待をかけている。第一次世界大戦のなかで日本は本格的な帝国主義国へのしあがりつつあったが、こうした転換期にあたって、関口はあらたに植民地政治に加わった一官吏として、従来の植民政策の脱皮を望んでいたのであろう。

関口がまず重視したのは、台湾と中国との関係であったが、これは第三信のところで述べる。つぎに問題にしたのは、台湾における官権万能主義であった。この第一信でも「官権中心と申すより官吏中心の例に候が、目下市中処々に台湾総督府文官職員録と大きな看板が出ており候、商店の如き各家必ず職員録が備えある由。（中略）『あ判任官が転んだ』『高等官が走った』という様に日常の些事も判任官高等官に候。小学の児供も家のおとっさんは何級俸だ

などといひ合おる由に候」と報じ、「もうすこししっかりした民間の人がいるといいと存候」と望んだ。

そしてとくに「本島には新聞三あるのみ、然も皆御用新聞的にて、総督府に対する少しの勢力だにない」ことをとりあげた。そして「社会には常に反対の勢力、相対抗する力があることが進歩の要件かと存候」という見地からもっと批判的な言論機関の登場を望み、「此頃相つづいて小さい乍らも文芸雑誌が二種発行され候、とにかく気運は動きおる様に候」と新たな動きに着目している。

五卷三号（大4・9）につづいてのった「台北雑信」では、「中南部の土匪騒ぎは案外勢力強かりし様に候」とその状況を報じ、これにも中国の影響がつよいことを述べて、対岸の中国に対する施設の必要を説くとともに、警察政治につぎのような批判を加えている。「現今の本島地方政治は警察政治に候、支庁長は凡て警部に候、大阪朝日によれば謀叛の標榜の四に警察官横暴を掲げおる様に候。（中略）事情やむを得ざるものありとするも、人民の警察官怨嗟の声あるは確なるべし」。そして権力一点張りの政治が民心の中心に触れていないことをあわせて指摘している。

さらに五卷六号（大4・12）にも、長文の「台北雑信」が寄せられている。ここでは御大礼奉祝の様子を報じ、旗行列に「本島人の公学校生徒」が加わっているのを見て喜びに涙ぐんだと述べたのち、彼が重視している公学校教育のことと、台湾と中国との関係についてくわしく数字をあげて説明している。そしてさきの反乱にかんして「此頃の台湾日々に領台以来の土匪と二号の標題で、その傍柱を三号で無智蒙昧の跡を見よ、狂態笑うに堪えたり」と書いてあるのをひいて、つぎのように台湾統治に反省をもとめている。この記事によれば、明治二九年以来の「匪徒」は六六七七、死刑の数は四四三五人（今度の特赦で減ったが）に及んでいる。一番多いのは明治三四年の一〇九五入、三年の九二三人で、三番目が今度の八六六人になる。明治三三、四年はいわゆる土匪の大掃蕩であるが、これ以後一〇年間は死刑数合計五六人だったのに、「本年此不祥事が起ったのは、何かその因と縁がなければなりませんまい」。

これを「無智蒙昧なり」「迷信度すべからず」などの語ですべて解釈し尽したつもりでは困る。「然し本気になって研究した庁長は一人もなかったのではありますまいか。」「盛世の恨事であります」。

こうした状況のなかで関口の提案した対策は「在台内地人はもっと統治民族として品位を高めなくてはいけません。もっと優秀なる地方官を要求します。地方の警察政治の革新を要します」ということであった。この最初の点については、第二信でも「内地人の品格低く、ややともすれば土人の輕侮を招く如き事あり、残念の至りに候。排日恐日よりも恐ろしきは支那民族より輕目の眼を以て見られはせずやということに候」と書いているが、この第三信では台東の馬蘭社には百万円もの金が多くわえられているが「此頃は金貸しを覚えて本島人や内地人に貸すそうです。然し本島人には容易に貸しても、内地人には庁が中にも立たぬとなかなか貸さないそうです。内地人は信用がないのです」というエピソードをしるしている。

そして植民地人民への対策としては、教育によって教化をすすめるべきで、自由思想が伝わるからといって、その向学心を抑えることはできない、自治を与えることはむしろ有害だが、ある程度まで彼らの政治心を満足させる必要があるとし、新設の公共中学校の卒業生に判任文官の資格を与え、ひいて一般官吏への採用の道を開くことを考慮していた。

つぎに台湾と中国との関係についてみると、すでに第一信でも「日支交渉（二一カ条要求のことをさす―引用者）の際は本島人も何となく心騒がしかりし由、交渉経過に対し内地人と喜憂を共にせざりし事も勿論と存ぜられ候」と書き、「南支南洋に対する策源地（踏石にあらず）として台湾の価値を高めること」の重要性を説いている。この第三信でも、さきの反乱に「日支交渉つづいて日貨排斥の排日思想の影響あることはどうしても見逃せません。勢力範囲たるべき福州に撃橋の碑を建てしめたのは喜しい事ではありません。福州は沖繩より近いのであります」と述べ、こ

これから中国にたいする日本の威信を高めるべきだとする論理をひきだしている。ただ関口は「くだらぬ事に利権利権と騒ぐ日本人は卑しく見くびられて、北清事変の償金を返してその金で留学生を送らせている米國の方を真の友人とは思わないでしょうか」と述べているように、軍事的、政治的な威圧ではなしに、文化的な威信をしめすべきだと強調していることと見ることができる。植民にかんする通信はこれで一段落し、大正八年の朝鮮統治改革問題がおこるまで中断されることになる。

ついで関口が寄稿したのは、一連の憲政論ならびに政治評論ともいうべきものであった。関口は六卷四号(大5・4)の通信「台北より」のなかで、本節の冒頭の引用につづけて、近ごろ法学の専門雑誌のほか『太陽』『新日本』『中央公論』『新小説』『第三帝国』『洪水以後』などにも毎号憲法問題がのることにふれて、「一般国民が憲法政治に心を止めてきたことを示すものである事を喜ぶと共に、之等が一般国民の立憲思想を涵養する上に大なる影響を有していることを思い」「之に対して破邪題正の筆を揮うことは、我一匡社の勤めと思います」と述べ、この意見を卒先躬行して、同じ号に「憲政と民意」をのせた。

この論文は、まず、「近時憲法上の論議、雑誌新聞に表わるるもの多し。而してその憲政の現状に満足することを得ずして之を非難するに於て一致すと雖、その憂うる所或は閥族の専制なり、多数党の横暴なり、各々其立場を異にするに従いて結論同じからず。現時の政情を見て憲政の墮落なりとするはよく、(中略)現今の制度の下に改善の余地なきが如き論を聞くに至っては、吾人の立憲思想の根本を揺がすもの、俄に首肯する能わざるなり」と説きおこして、憲政の改善に期待する立場を明かにした。こうした見地から関口は、市村光恵、上杉慎吉、吉野作造の所説をとりあげる。そしてまず市村博士が三権分立論を根拠に下院の多数が政府を組織するときは多数党の専制を招くとして党弊を批判し、多数の専制を緩和する避難所を貴族院と枢密院にもとめようとするのは、あまりに感情的な「憲政逆

転論」だと批判する。つぎに上杉慎吉博士の「民意代表論」は、民意は国会によっても代表されず、集会演説や新聞紙によっても表現されないとするばかりか民意の存在そのものを疑問としているが、民意の存在しないはずはなく、博士の所説は人民を国家外に放逐しようとするその憲法論と相通するものである。「民意なるが故に、民意が直接に国家の意思となるは民主国にして、君主国に於ては民意は君主の意思を通してのみ国家意思となる。」そして「君主国は選挙権の拡張、更に国民票決の如き民衆的努力の包容をなすことによりてその大を為すを得べし。君主の専制的勢力の過大は自らを小ならしむるものなり」というのが、関口の立場であった。

彼はまた吉野作造博士が「憲政の主義は民本主義にあり、而して民本主義の徹底的実現は政党政治による責任内閣制度に倚らざるべからず」としながら、半面で「民衆勢力の直接代表たる下院の威望甚だ重からざる」を遺憾として下院の優越的地位の確立を説く「政党政治論」に同感を表した。だが二院制度については「我国に於ては、国民の組織階級を有機的に現わしおるものとして実情にかなえるもの」で「両院の衝突は両院協議会によって之を解決するを以て足れりとせん」とたやすくこれを肯定する立場をとっていた。この点では、吉野より現状肯定的であった。関口は西洋諸国の憲法が闘争衝突を根本として発展したのにたいし、日本のこれは国政を一致共同して円滑に行なうための「恩賜品」だとする考え方をとり、専制打破のための制度的改革の必要は認めていなかった。そして「今の議会の罪は人の罪にして制度の罪にあらず」、国民の自主自治の立憲精神を養うことで憲政を発展させうる。「我国現時の憂いは、民衆の勢力の拡大にあらずして、国民の自覚を妨げ、専制の昔にかえさんとする思想なり。民選議院に勢力の中心集まらんとすることに非ずして、識者階級が議員選挙、議院政治に冷淡なることなり、所謂危険思想にあらずして政に当るものの不真面目なることなり」としたのである。

こうした関口の主張は四四号(大6・6)の「憂うべきは民衆の傾向にあらずして開明専制的思想なり」に積極的

に展開される。ここで関口は「忠君愛国を独占せんと」し「一般国民を国家以外に放逐せんとする」官僚主義者の「忠君愛国一手専売的思想」を批判し、「表現の段階を異にしているが国民は君主と共に国家である。国民を外にして国家がない。（中略）此点を事実に於て明かにしたものが立憲政治である」とする。そして天皇と国民との関係については、「天皇が実際の政治を親らせることは我国体の要件ではない」、「國務大臣の奏上することは凡て嘉納あらせらるる、ここに國務大臣の責任の根拠がある」と主張する。こう論じてくると、当然國務大臣を任命する根拠の問題、つまり議院内閣制か大権内閣制かという問題がおこってくるが、関口はこれと理論的にとりくむことをさけた。ただ「政党政治は憲政の運用上当然のことと思う」、憲政擁護運動で官僚政治がいったん葬られたのち「再び元老政治になったのは、罪は政党者の勇氣不足にある」、「寺内内閣は自然の多数党に復した政友会に政権を譲る方が論理の当然の帰結であろう」と述べるとともに、真の立憲政治が確立するためには、国民の立憲教育が必要なことを力説するにとどまった。それは民衆政治つまり少数者の特権を打破して民衆の意思にもとづく政治を実現するというよりも、それぞれの階級や立場を占める国民の意思を政治に反映させる、国民政治ともいべき立場を主張するものであった。

こうした立場をとる関口は、政党の現状にたいする批判者であった。四四号の「不信任案上程の衆議院」では「自分は昨日の議會を傍聴した。いつも乍らの醜態に今更乍ら驚いた」として「此の如き現在の議員によつて憲政擁護を叫ばれても、憲政の神は泣くであろう。官僚の打破よりも代議士の革新を第一とすることを感ずる」と論じた。そして政党人については、尾崎行雄の演説も「音が大きいが弾は小さい大砲」にすぎぬとし、武富時敏以外には経綸ある政治家はなく、「現に二大政党の首領は共に官僚出身であり、政友会の床次、憲政会の浜口の如き、領袖として政党出身者に優っている」として、むしろ官僚出身書の経綸を評価する。だがそれと同時に「只政治界に於てのみ青年が老人の下に屈服しているのは何故か」と問うて「之は教育の然らしむる処、境遇の然らしむる処」すなわち「青年に

政治教育を施さず、文官任用令によって政治に志ある青年を官吏たらしめ、秩序ある昇進によって徐々に不識不識に属僚化し奔放の気をぬいていったからである」と、官僚政治の責任をついてもいたのである。

そこでかれが政界改革のために主張したのは、選挙権の拡張と、それを通じて立憲政治における言論の役割を高めることであり、とくに有識者の政治参加の道をひろげることを重視した。彼にとつて議会政治は、とりわけ意見の登場する舞台であつた。「少数なりと雖も、議会に於て天下に向つて意見をはくことが出来、多数党若くは多数を擁する政府を攻撃しての反省を促がし刺激を与えることができるのである。(中略)之によって国民の或部分の意見は議会に代表され、それらの国民は鬱を散じ、腹ふくれずにすむのである。之によって国民の政治心は啓発され、人心倦まざるを得るの妙用を代議政治が発揮するのである。」「言論の自由、之は眼覚めたる国民の最も大切な宝である。

(中略) 言論抑圧程文明国民に対する政治に危険なものはない」。

関口の選挙権拡張論は、こうした主張のうえに立っている。農民が有権者の多数を占めて、知識階級が選挙権をもてない状態では、選挙権を「金錢を以て換うることを得る債権」だという考え方が横行して、政見の是非は問われなない。国務にたいする知識のない今の代議士と、政見にたいして不導体の選挙民とに憲政の前途をまかしておくことはできない。こうした立場から、彼は少くとも専門教育をうけた者にまで選挙権拡張を主張する。五三号(大7・3)の「若き国民と老いたる政治家」でも「納税額の低下は五円にて我慢すべく、これよりも第一に中学校少くも専門学校程度迄には拡張すべきものと思う」とし、五八号(大7・8)の「貴衆兩院改造」では、「普通選挙に追々することとして」まずは自治団体の公民権ある者、つまり市制町村制の直接国税二円以上か、少くも府県制の三円以上とすべきであり、知識階級にたいする拡張は、大学、専門学校を選挙区として、それらの卒業生に選挙権を与える、一種の複数選挙を提唱する。そしてこうした改革は、外部の力によって行なうほかはないとして「選挙法改正の国民的

大運動を起す」ことをよびかけている。

これとからんで、関口はみずからその一員である官吏の言論の自由の拡張を主張する。「官尊民卑で、比較的どの国よりも官吏の数が多く、知識階級の大部分が官吏社会に集っている我國の現状に於ては、官吏が一斉に黙して言わずでは、国民一般の知識の向上に大いに關係する。」関口の主張には、こうした知識階級としての抱負とともに、言論社会にたいする技癢ものぞいている。「今官立大学出のものは多く官吏となつて黙っている。言論社会は大体に於て私立大学系統の者の支配下にあるといつてよい。そして言論界は多く失意の人がいつている。社会の待遇が悪い——コハモテしても實際の尊重がない——から氣がひねくれる。その言や奇激ならざるを得ない」「官吏の言論解放は最も手近い有効な言論指導の法である」(「官吏と言論の自由」五六号、大7・6)

なおこれと関連して、関口は「下級官吏の救済」(五三号、大7・3)以来、下級官吏にたいする社会政策の必要を力説しているので、ふれておこう。この小論では「今や官吏だとして威張れなくなり、一方官吏としての品位なり威厳は保たねばならぬ」という時代で、将来高等官になる見込みのない下級官吏はいつかは不平を具体化する時が来るとし、殊に巡査と教員の問題は早く解決する必要があると主張する。そしてその対策としては、「一方外に對し監督干渉事務を減じ、他方局長位が盲判をつかずに下僚を指揮して自ら進んで行ない、少くとも現員の三分の一を減じ、その分で俸給の五、六割を増すとともに、上に進む途をあげて下級官吏の無氣力化を防ぐべきだと提唱している。関口はこのころ「目覚まし法科大学の改革」(五八号、大7・8)を書いているが、旧い諸機構を改革して新風を吹きこむ必要を痛感していたのであろう。なお関口は下級官吏救済の具体策として「住居問題と官舎」(五八号)を説き「家族手当支給の必要」(六〇号、大7・10)を論じている。工場法と連絡をとり、一五才まで一人につき一律五円支給という案である。

ところで言論の自由を重視し、それによって国民に清新の氣をもたらしめんとする関口にとって、「寺内流の誠心誠意を自負して、民をして知らしめず捩らしめんとする主義」の寺内内閣は、批判の対象であつた。「不言実行というは、専制時代にあつては、政治家の最も尊むべき徳行なり。然れども、国民相互に國務の負担を分かち、国民の協力と了解によらざれば政治すべからざる今日に於ては、採るべからざる主義なり」「新聞は○○を○○し、宛然提灯行列の如く」「我等は我國の世界戦争に於ける位置さえも、外国新聞によらざれば知り難きなり」「國民は我國運の前途に大なる暗雲あるを知らず、小成に氣驕り歌舞し淫樂す」（「不言実行主義を排す」五八号）。國民は一等国の虚名に思いあがり、政府は自己の勢力を維持し、悪政を糊塗せんが為に、國民を愚にしたり。（中略）國民は國家の進路を知らず、尚安を貪り、荒怠、墮弱、遂に今日國難迫るの時、戦わずして既に疲れたるの醜態を暴露するに至りたるなり」（「國民は何故に疲れたるか」同前）

こうした過程をへて、関口は、責任内閣としての政党内閣を積極的に主張するようになる。「國務の責任は凡て國務大臣にある」。「大臣の責任が天皇に対しての責任であるというのは理論上で、大臣が國務の執行に於ては、天皇に對し奉るは勿論、議會に對するのみならず天下に對して其の責任を以てしなければならぬ、それが憲法の真意である」。「立憲政治に於ては、議會の多数と共にせざれば國務の進行を円満ならしむる事が出来ないのは自明の理」であるからして、「吾人は政治上の責任の所在明かなる政党内閣を主張する」（「責任の所在を明ならしむべし」五六号大7・6）。つまり政党が國民を代表するとの理由づけによってではなく、議會を媒介として國民にたいして政治上の責任を明かにしうることを根拠として、政党内閣が主張されたのである。

おりから尾崎行雄は『立憲勤王論』（大6・12、文会堂書店）を著し、政党内閣は君意民心の一致をはかる器械的則制度的方法であるとこれを正当化した。これに関口は批判を加えた（「『立憲勤王論』を読む」五五号、大7・

5)。その一点は立憲政治と勤王とを結びつけようとする抽象論にとどまって、立憲政治の理論的考察や実際の体験にもとづく具体的提案の欠除していることである。関口はやがてこの注文をみずから議会改革論のなかで生かそうとすることになる。第二点は、政党が党利党略にのみ走って国政上の主義経綫をもたないとする尾崎の意見に同調しながらも、尾崎がこの欠点を国民の責に帰そうとするのに反対したことである。関口は本書が政党と人民との關係を無視している点につき、国民の政治的知能はすすんでいるのに、官僚の警察政治で言論集会の自由が圧迫されたうえ、政党政治家は党利党略のため少数選挙民の腐敗をすすめて選挙権拡張は欲せず、新聞もまた大隈内閣以来党派的色彩を帯び、金権の勢力も増大しつつあるため、これが憲政に反映されないのだと主張する。選挙法改正による政党改造に彼は期待をよせていたのである。

関口の政党政治にたいする政治史的な見方は、憲政擁護運動を一応評価したうえで「シーメンス事件は真に政界の毒藥なりき。海軍の廓清よりも政界の混濁敗腐によって我国はより大なる損害を蒙りたり」として、これが官僚政党の妥協、情実因縁の横行をもたらししたことを批判する。こうした理解は、憲政擁護運動の中心となった政友会とくにその少壮派を評価するとともに、シーメンス事件で藩閥と通じた同志会ならびにその後身の憲政会に攻撃をむけることになる。「政友会が看板を塗りかえるのは近きにあるべし。政友会の少壮組は憲政擁護運動の時の如く遂に利用され利用しつつ幹部を動かすべし」というのが、政界の将来にたいする具体的な期待であった（「若き国民と老いたる政治家」五三号、大7・3）。

このころ関口は「後継内閣二た揃」（五六号、大7・6）を書いている。その一つは現外相の後藤新平を首相に横すべりさせ、新進官僚を加えて、これを新政会と国民党とくつつけるか、または自治団をもとした新党のうえにのせようというものである。もう一つは憲政の正道をゆく政友会内閣で、とりあえずは西園寺公望を首相にするが、し

ばらくしたら原敬を首相、床次を内相にしようというものである。その顔ぶれを並列させてのせておこう。*は寺内内閣からの留任である。

総理大臣	後藤 新平	西園寺公望
内務大臣	*水野錬太郎	原 敬
外務大臣	伊集院彦吉	牧野 伸顕
陸軍大臣	田中 義一	本郷房太郎
海軍大臣	財部 彪	財部 彪
大蔵大臣	*勝田 主計	高橋 是清
逓信大臣	中村 是公	中橋徳五郎
農商務大臣	*仲小路 廉	野田卯太郎
司法大臣	平沼騏一郎	元田 肇
文部大臣	*岡田 良平	床次竹次郎
裁鉄道院総	長尾 半平	鵜沢 総明

大正七（一九一八）年九月に原敬の政友会内閣が成立すると、関口はこれを歓迎し、とくに原首相の縦横の答弁をはじめ各大臣の答弁ぶりをほめたたえた（「政党大臣の答弁振り」六五号、大8・3）。これをはじめ関口が時評で政友会内閣に好意をしめたことは『社会及国家』の同人である鎌田六三人、小林俊三から、政友会臭がふんとくるとの非難をこうむった。小林は「政友会内閣は金持内閣で」「商工階級抬頭の一齣を泰西の御手本通りやったまで」だ、「立憲政治とは資本階級専制の術語」にすぎないとこれを批判し、いまや「汗と血の支配する時代が来た」と主

張した（「黙太郎君に与ふ」六九号、大8・7）。これにたいして関口は、原内閣を理想の内閣とはしないが「多数党を擁する内閣が責任を以て所信を実行するのがいい」とし、「煮えきらなくてもどうしても我輩は今の処立憲政治に執着がある、普通選挙にすれば我國民はもっと覚醒してもっと立派な立憲政治が生れ出づると信じている」と答え、小林の主張は具体的方策をしめしていないと反駁している（「具体的方策如何、小林君に答う」七一号、大8・9）。このころの関口の時評はたしかに政友会臭がつよい。憲政会も国民党も政友会以上に國民の信頼を得てはいないのだから、多数党である政友会内閣の責任ある政治に期待をかけるのだ、やがて國民のなかから新しい勢力が生み出されてくるだろう。というのが彼の公言した立場であつた。

大正九年二月には原内閣は普通法案が階級打破の不穩思想にもとづくとこれを攻撃して議會を解散し、小選挙区制による総選挙で絶対多数を獲得するが、関口はこれをも貴族院に対する宣戦の第一声だと評価する。彼はまず、この解散は政府が予算案審議などで苦境におちいり、普通法案にたいする足なみが乱れるのを惧れて先手を打つものだと見ぬきながらも、その半面この選挙で政友会が絶対多数を占め、つぎの選挙を普選でやることになれば、元老、枢密院、貴族院、軍閥の勢力を過當に恐れる必要がなくなり、やがて責任内閣が確立するとした（「解散の理由」七五号、大9・5）。原の立場をあまりにも甘く見すぎており、やがてこの関口の見通しは裏切られることになる。

同じ号の「森戸事件第一審判決に就て」でも、関口はいちおう問題の中心は「内務官憲の勝手な判断によつて発売禁止を行い、司法官憲は発行人（編輯人）印刷人署名人を刑罰に処することが出来る」とする新聞紙法を改正することであると主張した。だが他方で「もし政府があれを処分せずに貴族院辺からつつき出されたとしたら、森戸君は政府攻撃の材料として大逆犯人にされてしまったであらう」と論じて、問題点を思想・言論の自由の問題からそらすことで、原内閣を弁護する立場をとっている。

総選挙後の臨時議会で尼港事件の責任が問われて政変説がおこったときにも、関口は「原内閣が曲りなりにも多数政党を基礎として腰を落ちつけたとすれば、之によって公明ならざる政変の頻発を防いだ事に於て、一步正しき道に進んだものと云わなければならない。国民は新に原内閣に對抗すべき勢力を産み出さなくてはならない。此の意味に於て吾人は原内閣居据りの意義を認める」と評価している（『時評』八〇号、大9・10）。だがここでは、関口は「政党内閣はまだ純然たるもので無いのに、既に政党政治の弊害は著し」として、その理由を「首領の政党であつて国民の政党でないからである」とした。「首領がその下に黨員を集めるためには官職と利益とをその餌とせざるを得ない。選挙を指揮するには地方問題を利用するに至るのである。選挙民の数は少なきを便利とする。此に普通選挙反対の理由がある。方向が反対にならなければならない。政党首領より国民への方向が、国民より政党への方向にならなければならない」と、ようやく原内閣流の政党政治にたいする批判的立場をしめしはじめている。

こうした関口の立場からして、この時期の評論は、原内閣論よりも「師範教育を改革せよ」（六八号、大8・6）や「文官任用令改正」（同上）のように、これらの機構に新風を吹きこむための具体的な制度改革論のほうが興味がある。後者では、官場空氣の沈滞を打破するには「任用令の改正よりも官吏執務法規の改廃と執務方法の改正と官吏昇進（年限）の制限撤廃を以てより多くの効果を収めるのではないかと思う」と独自の視点を提示している。外交官や植民地官吏にもそれぞれ一節をさいているが、外交官については任用範囲を限定しているため型にはまってしまうと批判する。彼等の考え方は「常に外国を主とし我國を従とする」、「労働問題も世間の仲間入りが出来ぬからの問題でなくて我國の社会問題自体として考えなくてはならない」、「外交官は交際官でなくて国士でなければならない」として、その任用範囲の拡張を主張している。

おりからのパリ講和会議については、関口は「英米を盟主とする國際連盟」（六五号、大8・3）を書いている。

この題名からもわかるように、「独逸が軍国主義を以て世界に独逸文化を布かんとせる所を、英米が国際連盟の組織を以てデモクラシーの美名を以て、世界は自己の支配下に置かんとするなり。両者何の異なる所あらんや」という立場に立つものであった。彼は、大正七年一月の『日本及日本人』にのつた近衛文麿の「英米本位の平和主義を排す」を、『太陽』翌八年三月号の二荒芳徳の「戦後の国民是と国民思想の確立」とならべて「華胄公子の手になった近來の二名篇」と賞讃している（「二荒芳徳君の『国民思想の確立』」七十六号、大8・4）。

関口は近衛と同じくウェルサイユ体制にたいする現状打破を主張していたのである。「吾人は平和を熱愛す、然れども英米本位の平和を謳歌するものにあらず。既に有するものは現状維持を願ひ、まだ有せざるものは現状の打破を想う」。だがそこで問題になるのは、民族解放運動、具体的には山東問題ならびに朝鮮三一運動にたいする態度である。関口は「講和会議と我国」（六十八号、大8・6）で山東問題にふれているが、そこには日本の帝国主義政策にたいする反省は見られないといつてよい。

これに関連して、この時期の関口の植民地政策論をみると、彼は朝鮮の三一運動に関連して植民地教育問題を論じ、植民地統治制度の改革についてくわしく考察した一連の評論をのせているが、そこでの主張はおおむね「台北雜信」の延長上にある。

関口は三一運動の直後に六十六号（大8・4）に「朝鮮暴動と植民地教育問題」をのせたが、彼は三一運動を目にしたがらもなお「今日の国際場裡、朝鮮が一国を為すの力なく、朝鮮人民が日本の治下に旧韓国時代よりも遙に物的幸福を得てその生活を為しつつあるのは、吾人の疑わざる所なり」と日本の植民地支配を基本的には正当化していた。だが同時にそれが「初め北朝鮮の比較的未開なる地方に勃発せし、天道教徒其他迷信の愚民の挙」とする「総督府側の口吻」を裏切つて、「主として新教育を受けたる、もしくは受けつつある者によつてなされつつある事」に注意を

促がし、「世界一般の思潮の波が、朝鮮人に如何なる波動を与えつつあるか」に思いを致すべきだとし、朝鮮における武斷政治、憲兵政治を批判した。しかし彼がとくに力説したのは、それが「形式的虚飾政治」だということであり、これを植民地の実状に即したものに高めることを望んだのである。いわく、

「植民地統治の任に当るものは、内地の官吏が地方有力者、政党関係、実業家輩の氣を兼ねる以上に民心の裡に入りて事を行わざるべからず。然るに議會なき、言論なき、批評なき植民地に於ける官吏は、放漫にして、ややともすれば横暴に近き政治をなしつつあり。而してその政治たるや、地方人民に対するに非ずして、地方官憲は總督府に、總督府は中央政府に対して諸般の行政は為されつつあり。行政は実状に伴うよりも、文書、統計の上の表面政治たり」。彼は「今回の暴動が天道教徒になされたりというも、その二百万の信徒を有する天道教なるものは、總督府の印刷物には現れ居らず、最近朝鮮事情要覽というを見るも（中略）天道教に一言を費すなし」と例示している。

彼はまたこうした観点から愚民政策に反対し、植民地教育の普及を主張する。「植民地土着民になるべく教育を施さざらんとする思想は、実は母国民の教養不足に対する危惧の反映なり。（中略）統治は畢竟人と人との問題にして、大なる人格が小なる人格を統括する關係なり。植民政策の根本は実は母国民教育にある事を忘るべからず」と論じて、台湾についてと同様に植民地在留の日本人のあり方についてい批判を放ったのである。

やがてその年の夏に原内閣によって朝鮮統治の改革がすすめられると、関口は六九号（大8・7）に「朝鮮統治問題に対する世論概観」を書いたが、そこでの彼の態度は漸進的であり、現実主義的であった。大正八年八月に朝鮮總督武官制を文武官併用制に改めたことにはもちろん賛成の態度をとり、江木翼が「我が国の憲法政治の実際に於て政務が縦に両断されている。（中略）重要な國務の軍務が國務大臣輔弼責任以外の事項として、軍令機關により帷幕上奏の形に於て裁可実施される為に文官に軍務を託する事が出来ない結果を生ずる。之が今日の總督制にも祟ってい

る。(中略)軍務を挙げて文官の管理に置き植民地事務の統一を図り、非常急変の場合にも万遺漏なきを期せしめねばならぬ」(「植民地總督制度改革論」『中央公論』大8・7)と述べたのに賛意を表している。だがそれはやはり植民地統治を合理的、能率的なものにしようという観点に立つものであった。

関口は、わが国民の朝鮮人になりたいする態度に反省の余地があり、朝鮮人にも政治参与の道は開かねばならぬとするが、加藤高明憲政会総裁が演説し、また末広重雄博士の主張している朝鮮自治論にはつよく反対する立場をとった。朝鮮に自治を許せば結局独立に進むことになる。「朝鮮に独立を許すことは、日清戦争前に返す危険があり、併合の趣意にかなわない」。朝鮮自治は「永久の紛乱、統治の絶えざる不安定の因であると信ずる」。だが同時に、関口は「今日の世界で朝鮮人程の文化の程度に在る民でありながら自家の運命を支配する自家の政治に何等能動的交渉を有って居らぬというは実は異例だ」ということを認めて、「自己の政治に参与するの途を開き、自己の政治に就て責任を分担せしむる必要がある」という意味から、「朝鮮人官吏任用の途を大にし、進んで總督の立法にも参与せしむ」べきだとしたのである。朝鮮人官吏の任用は、朝鮮の支配層ないしは有能なエリートを日本の支配政策に協力させるもので、自治の承認にくらべてはるかに同化政策に役立つ性格のものであり、関口の意図もそこにあったのであろう。

ついで七二号(大8・11)には、関口は「朝鮮の新政」と題した長文の評論をのせた。その目次には、上、武人政治の撤廃、一、武断主義より文化主義へ、二、總督と兵権、附總督府の縮小、三、憲兵政治の廃止、下、融合主義の確立、四、差別撤廃と旧慣尊重、五、教育方針変更、六、地方自治の約束とあるが、本号には上だけのが、下はついにのらずにしまったようである。だがこれには、関口の植民地統治制度観が端的に現われている。

原内閣による朝鮮統治制度の改革で、朝鮮總督武官制が文武官併任制となり、憲兵警察が普通警察となったことに関口は大体において賛意を表しながら、いくつかの疑問を提出している。その第一点は、總督に陸海軍の統率権をも

たせなかったことについてである。関口は植民地においては兵を動かすの権は重要で、これが総督になくて軍司令官にあるとするのは、軍閥の勢力を植民地に残すことになるとして、これに反対したのである。かれはこうもいつている、「新領土が経済上の必要からではなく軍事上の必要から兵力によって獲得された關係上、軍閥は植民地を我物の如く思い、滿蒙から支那全部に亘ってその軍機の秘密に阻られて大蔵当局、議會から八ヶ間敷いられない豊富なる国費によって、外務省其他の及ばざる調査研究その他の活動をなしているのであつて、植民地は軍閥の手離し難い財産で多くの執着を予想し得るが故に、總督が文官になった暁に対立する軍司令官による軍閥の勢力を憂うるのである。内地に於ても鎮台以来軍人の地方政治に迄力を延ばしていたのはそう遠い事でもないのである」。

第二点は、總督府の縮小についてである。関口は植民地の統治は重大かつ困難で、しかも人民の自治の範圍が狭く特別立法も認められている以上、植民地の「特別の事情に通じている筈の植民地の官吏に任せること大でなくてはならない」として、總督府を縮小して中央政府の干渉をつよめることに反対の立場をとった。

第三点の憲兵警察の廃止については、憲兵警察の実状の説明が興味をひく、関口は、憲兵警察は單なる形容ではなく嚴たる制度上の存在であるとし、「朝鮮總督の命を承けて朝鮮全道の警察権を有する憲兵將官は警務総長であると共に政務總監であつたともいえる」、そしてその指揮下に各道の警務部長となつてゐる憲兵佐官は道長官も事實上如何ともするを得ざる実情にあつたとする。しかも「植民地の行政の殆ど凡てが警察事務であるので、且犯罪即決、民事争訟調停、執達吏事務取扱迄している」。「大正六年上半期に於ける犯罪即決件数三万二千四百六十六件、之が処断人員は有罪四万九千五百五十二人、無罪十一人、その他三百四十二人、合計四万九千五百五五人である。之を大正五年一年間の刑事訴訟第一審事件数二万一千九百二十五件と比して見るときは、『一般人民は即決処分に対し処断敏速にして且公正なりと称し其の感想良好にして總て正式裁判を請求するが如き者極めて尠し』』といつて済ましてはいられ

ない。「民事訴訟調停と雖も実情に於ては民事裁判と少しも異らざる事を憲兵にさせていたという事を思えば、朝鮮に於る憲兵は立法司法行政の権を一手に収めていたといつても過言ではない。」

関口はこうした制度が撤廃されたことの意義を高く評価するとともに、「吾人の攻撃するのは制度そのものである」とし、制度が変われば憲兵の服を巡査の服に着がえさせてこれを用いることが實際的の考えではないかと述べている。

そして結論としてはこう論じている。「従来の我が植民政策は侵略主義とは云い切れないが、国防本位、朝鮮も満州も南下する予想敵に対抗する主義の下になされ、対支政策もややともすれば此の鋒鋷を表した」。「総督が軍人でなくともよくなったというのは即ち此の植民政策の大方針の変更である」。「之は進んで軍令権が縦断的に国務を分けて国務大臣輔弼の外にあるが如き制度をも不可とするのである。此の如くして初めて国家の政治は軍閥から解放されて平和本位の途を行くことが出来る」。「云わんとする意味は憲兵でも軍人でも決して排斥するのではない。ただその性質上それが主となる制度がいけないというのである。侵略的臭味のある軍閥主義でない以上は、軍権はどこ迄も手段であり副になる位置になければならないというのである」。

関口はこのあと八〇号（大9・10）にも「植民地時事観」を書いて、おもに台湾統治制度の改革について論じている。その主たる趣旨は、これまでの評論とほとんど変わらない。ただ言葉のはしほしに「植民地統治の根本には、現在の国家に於ては或矛盾を感じる」といったことがでてくる。そして「一体今の議会、今の政治家（或は今の国民、今の国家というべきかも知れぬが）では仕様がなない。此の俣では植民地議員を包容する所か、植民地を有するという資格もないのである。異民族を包容して国家をなす以上は、母国の実力がなければ（それは武力と経済力とのみを意味しない）植民地の文化を進める事は、同時に離脱への歩を進めることである。此に於て実力なき国家は、植民地へ愚

民政政治を施さなければならなくなる。若し国際状態がそれを許さない以上、植民地を維持するには母国がそれだけ文化を進め実力を大にするの外はない」と述べる。これは「台北雜信」のリフレインである。だが日本の植民地統治能力にたいする疑問は、より深刻なものになっている。

この間、上述のように関口は大正八年六月に台湾總督府を辞して大阪朝日新聞社に入社し論説を書いていたが、一年後に同社をいったん退社して外遊の途にのぼる。そしてこの外遊の間にはさんで『民衆の立場より見たる憲法論』（大10・8）と『如何にして議會を改革すべきか』（大12・3）を書いている。この両著のことは、次節の最初でふれることにして、この外遊前後における関口の政党政治觀の変化をみておこう。関口は原内閣の成立以来これを多数党を基礎とした責任内閣として高く評価してきたが、大正九年の秋にはこの多数党が選挙民を上からあやつる性格のものであることに批判の目を向けるようになったことは上述した。大正一〇年になると、彼は議會政治が国民から遊離した存在であることをいつそうよく批判する。八六号（大10・4）の『時評』は「今年の議會で普選問題は少しく熱を起さず、労働問題の如き、殆ど忘れ去られたるが如きは、国民と議會との離れ去った事を示すもので、そこに大なる意味を感じざるを得ない」と説きおこし、「政友会も、憲政会も金権党であり、同じ成金に操を売り、同じ元老に媚を売り、同じ様に政綱も何も無く、只管政權の醜き争いを繰り返している。」議會では「下らない問題で騒いで実のある問題は凡て多数党の盲従と横暴で葬り去る。軍備縮少の問題の如きは、今議會第一の重要問題であり乍ら、碌に研究も討議もせずに一蹴してしまつた」と批判する。政党が国民を代表するには、国民の要求する政策を提示しなければならぬ。「我國の政党は先づ軍縮縮少か拡張か、その二つで判然分るべきである。軍費に六割を充てる以上は、政党は表面上幾つに別れていても同じ政策の外実行出来ない。この政策はズルズルベツタリに亡びに行く途を歩むものである」

政党が国民の要求する政策を提示できないのはなぜか。その原因は政党が貴族院、枢密院、元老という特権的政治機構の改革ととりくむことなしに、むしろれを利用してゐることにある。彼は「憲政擁護運動の時代に引込んでいい筈の元老を、愚にして意気地なき政党者派が利用して、又復活させたのである」として、原首相についても「原という人は寧ろ、元老に対しては政党、政党に対しては元老という、二つの勢力を巧に使ひ分けて来た」とその立場を問題にした。そして「宮中の某重大事件は、元老の棟梁山県公を自らの刃を以て自らを殺した様に見える」、「今度こそ復活させてはならぬ」、「元老無き枢密院は自ら面目の異なるものがあるであらう」と特権的機構の改革を主張した。もはや原内閣の影が薄いのに「ただ反対党の力が弱い為に、倒れずにゐる」。そこで原内閣休憩中の幕間内閣という噂が出ているが、「之は原氏が山県公を追った跡へ坐る様なものである。事実上の権力者が裏面において、表面の責任に他を立たせるのが一番いけない。此の両者は常に一致しなければならぬ。それが責任内閣の本義である」とつよく反対した。他方、野党の憲政会が「是が非でも敵党内閣を倒そうと相手撰ばずに貴族院と手を握」ることに反対した。そして具体的な方策としては、貴族院に議席をもつ「憲政会の加藤（高明）子、若槻（礼次郎）氏を含み、衆議院には憲政会を与党とした貴族院内閣が出来るのが、一番今迄の成り行からいったら合理的である」とし、憲政会を与党とした貴族院内閣が衆議院と決戦することで、わが国立憲制の特色なり欠点なりを明かにすべきだと主張した。

当時原首相は政友会、研究会の提携による両院縦断策を打ち出していた。関口は責任政治の立場からこうした妥協政策に反対し、貴衆両院の決戦によって責任政治のルールが作り出されることを望んでいたのである。そして関口は当時野党として普選や減税をより積極的に主張していた憲政会を「純然たる官僚臭味の政党」としてその脱皮に期待せず、ひたすら政友会内の幹部と少壮組の対立に着目し、少壮組は主張を貫くのに勇氣が足りないが、この動きが強まって「内部から政友会が分裂するのが、今のところでは政党の対立が出来る唯一の途である」として期待をよせて

いたのである。

関口の外遊中の大正一〇年十一月原首相は暗殺され、そのあとをついだ高橋是清政友会内閣は翌一一年六月に政友会の内紛のために倒れ、関口が帰国したときには、加藤友三郎海軍大將を首相とする中間内閣となっていた。帰国後の関口は、一〇六号(大12・4)の「参謀総長の自決」「軍規弛廢の責任」でシベリア出兵を批判するなど活潑な時評活動を展開した。同号にも「四十六議會の一特色」を載せ、議會政治の現状をいっそうするどく非難した。政友会も憲政会も革新俱樂部も槍玉に上がった。いわく、「政府が所謂中間内閣であつて、標的が明瞭でない為もあるが、与党たる政友会が、専ら議場に於ける多数を頼んで、國民の代表たる事を忘れ、國民の間に国政を諒解せしむるの努力を欠き、現在の多数が必ずしも國民多数の信望を裏書するものに非ず、沙上樓閣たるに思いを致さない為である。又反対党たる憲政会も、徒に熟柿主義の空だのみをして、信を國民に得るより先に、或は貴族院の不平党と、或は枢密院の陰謀党と疑を通じているが為である。革新俱樂部も各種問題に多少の新味ある提案をなすも、連絡なく、組織なく、実行に対する責任なく、自ら空論に終るを承知の上でやりおるが如き態度見え透くが為、國民を動かすに足りない。」そのため「議案の多数は國民の實生活に触れたものは一つもない。」

関口がこの議會の特色として積極的に認めたのは、「憲法条章に対して、實際の憲政運用上から幾多の疑問を生じて来た」ことであつた。「我が憲法政治に於ては、政党が発達して來、衆議院が有力になつて來ると、あつちこつちに差支へが出来る様に出て來るのである。」「政友会の少壯組が、議會制度改正調査會設置の建議案を出したのも、その現われである。革新俱樂部が會期延長、継続委員會、予算審議期間等の具體的問題を提げて決議案を出したのもそれである。」関口は議會政治の罪を單に人の問題ではなく、制度の問題と認めるようになったのである。

そしてこうした動きをもたらししたものとして、関口は議會外の動きに着目する。「時代錯誤的反動団体であつても

国粹会の存在は無視出来ない。在郷軍人団は恩給問題で動いた。水平社の運動も然りである。社会運動特に政治的方面に最も影響すべき我が農民運動は、外から社会を改造せしむべき最も強力なる力である。議会の内に於ても流石に此の如き影を僅かながら反映している。そこに不安がある、動きがある、現状の俥ではいられないものがある」

これ以後、関口は野党を含めた既成政党に国民の要求を代表する媒介的機能を期待することに見きりをつけ、議会の外の集団が政党に進出することに期待をよせるようになる。一〇九号(大12・7)の「呆れた政党」では、後藤新平の日露交渉とくらべて政党が看板にかかげた政策を本気で実行する意思がないのを批判して、「一後藤子の出来る事が、二つ半の政党が集って出来ないばかりか、之に対してウンともスンとも云えないでいる」、「政党の悉くは、日露交渉の前に無能無策の暴露を示して遺憾ない」と論じ、さらに「これら呆れた既成政党をやつつける筈の革新倶楽部は、少しもその目的に対して精進していない」と評した。そして彼は、武藤山治の実業同志会に注目した。商工業者が自ら直接にその利益を主張し或は代弁すべき者を出すことは、今まで中間にあつて翰取りをしていた者の存在を脅かすことになる。「政友会辺で職業別政党がどうの、階級的政党がどうのと云つて、自分が各種職業にわたり階級無差別に一般国民を代表している様な顔をしているのは滑稽である。この顔の厚皮をむく意味に於ても、商工党の出現が、革新倶楽部辺の既成政党打破よりも効力あると思われる」。関口は、議会外の集団が政党を媒介とすることなく直接に議会に登場することではじめて議会改造が可能になると考えるようになったのである。

『社会及国家』所載関口泰論文・時評・随筆一覧

凡例 1

関口泰の論文・時評としては本名のほか瀬名黙太郎、黙太郎、黙、S T生の署名のものをとった。

2 関口関係の記事も必要と思われるものはとった。

3 号数だけで発行年月のブランクのものは、未見の号である。

4 所蔵箇所の記号はつぎの通り。関∥関口家、国∥国会図書館、京∥京都大学経済学部図書館、一∥一橋大学図書館、法∥法政大学図書館。これは見た順序にならべたので、いちばん上は私が現物を利用したものになる。それ以外は原則として文部省大学学術局監修『学術雑誌総合目録・人文科学和文編』（昭84）によった。国会図書館の分は、綴じの関係で目録と現物にずれがあるので、現物によった。法政大図書館のものは、他の欠号分だけをしめした。

号数	発行年月	所蔵箇所	関係論文・時評・随筆
一卷一号	大2・9	国・京・一	
一卷二号	大2・10	国・京・一	表題に「社会及国家に関する一匡社の主張及研究」とあり（第四五号まで）
一卷三号	大2・11	国・京・一	
一卷四号	大2・12	国・京・一	
二卷一号	大3・1	国・京・一	
二卷二号	大3・2	国・京・一	
二卷三号	大3・3	国・京・一	
二卷四号	大3・4	国・京・一	

二卷五号	大 3・5	国・京・一	
二卷六号	大 3・6	国・京・一	
三卷一号	大 3・7	国・京・一	
三卷二号	大 3・8	国・京・一	関口法学士、君島（一郎）・藤井（啓之助）の紹介にて入社
三卷三号	大 3・9	国・京・一	
三卷四号	大 3・10	国・京・一	
三卷五号	大 3・11	国・京・一	
三卷六号	大 3・12	国・京・一	関口泰「戦後思潮変動に対する準備」
四卷一号	大 4・1	京・一	
四卷二号	大 4・2	国・京・一	
四卷三号	大 4・3	国・京・一	
四卷四号	大 4・4	国・京・一	
四卷五号	大 4・5	国・京・一	
四卷六号	大 4・6	国・京・一	
五卷一号	大 4・7	国・京・一	
五卷二号	大 4・8	国・京・一	黙太郎「台湾に於ける土民教育」
五卷三号	大 4・9	国・京・一	黙太郎「台北雑信」

四二号	大 6・2	京・一	
七卷五号	大 6・1	京・一	
七卷四号	大 5・12	一	
七卷三号	大 5・11	京・一	
七卷二号	大 5・10	京・一	
七卷一号	大 5・9	京・一	
六卷八号	大 5・8	京・一	
六卷七号	大 5・7	京・一	
六卷六号	大 5・6	京・一	
六卷五号	大 5・5	京・一	
六卷四号	大 5・4	京・一	関口泰「憲政と民意」 黙太郎「台北より」
六卷三号	大 5・3	京・一	
六卷二号	大 5・2	京・一	
六卷一号	大 5・1	京・一	
五卷六号	大 4・12	京・一	瀬名黙太郎「台北雑信」
五卷五号	大 4・11	京・一	
五卷四号	大 4・10	京・一	

四三号	大 6・3	京・一	
四四号	大 6・6	京・一	関口泰「憂うべきは民衆的傾向にあらずして開明專制的思想なり」
四五号	大 6・7	京	関口泰「不信任案上程の衆議院」
四六号	大 6・8	京	
四七号	大 6・9	京	S T 生「時の人」
四八号	大 6・10	京	
四九号	大 6・11	京	
五〇号	大 6・12	京	
五一号			
五二号	大 7・2	京	
五三号	大 7・3	京	瀬名黙太郎「若き国民と老いたる政治家」 S T 生「下級官吏の救済」 在台湾 S 生「社員諸君」
五四号			
五五号	大 7・5	京	関口泰「『立憲勤王論』を読む」
五六号	大 7・6	京	関口泰「官吏と言論の自由」 瀬名黙太郎「責任の所在を明かならしむべし」 S T 生「後継内閣二た揃」
五七号			
五八号	大 7・8	京	瀬名黙太郎「不言実行主義を排す」 関口生「貴衆両院改造」 黙太郎「出兵と政局」 関口生「目覚し法科大学の改革」 S T 生「国民は何故に疲れたるか」 「住居問題と官舎」

五九号			
六〇号	大7・10	京	黙太郎「官報と政府機関新聞」 同「人心を察し得ざる政治家」 同「国民の眼に映ずる山県公」 ST生「家族手当支給の必要」
六一号			瀬名黙太郎「日英米三国同盟・海主陸従・選挙権拡張」 関口泰「愛の政治」
六二号			
六三号	大8・1	一	関口泰「上杉先生の教を乞ふ」 君島関口両社員通信
六四号	大8・2	一	
六五号	大8・3	一	瀬名黙太郎「英米を盟主とする国際聯盟」 時観子「時事問題管見」(一部に黙太郎の署名あり)
六六号	大8・4	一	関口泰「朝鮮暴動と植民地教育問題」 黙太郎「二荒芳徳君の『国民思想の確立』」時観子「時事問題意見」(一部は関口の執筆)
六七号	大8・5	一	
六八号	大8・6	一	瀬名黙太郎「師範教育を改革せよ」 関口生「文官任用令改正」「講和会議と我」ST生「口語体の祝辞と国語教育」 黙太郎「鎌田君に答ふ」
六九号	大8・7	一	関口泰「朝鮮統治問題に対する世論概観」 小林俊三「黙太郎君に与ふ」 関口社員「化蕃物語」
七〇号	大8・9	国・一	
七一号	大8・10	国・一	黙太郎「具体的方策如何(小林君に答ふ)」
七二号	大8・11	国・一	関口泰「朝鮮の新政」
七三号	大9・1	一	
七四号	大9・2	一	

七五号	大9・5	一	関口泰「解散の理由」 関口生「森戸事件の第一審判決に就て」
七六号	大9・6	国・一	
七七号	大9・7	国・一	
七八号	大9・8	国・一	
七九号	大9・9	国・一	
八〇号	大9・10	一	瀬名黙太郎「時評」 関口泰「植民地時事観」
八一号	大9・11	関・国・一	瀬名黙太郎「二つの立場（産児制限に就て）」 関口泰「時評」
八二号	大9・12	国・一	
八三号	大10・1	国	
八四号	大10・2	国	
八五号		法	
八六号	大10・4	関	関口泰「時評」
八七号		法	
八八号	大10・6	国	
八九号	大10・7	関・国	
	大10・8		関口泰『民衆の立場より見たる憲法論』を配布
九〇号	大10・9	国	

九一号	大10・10	国	
九二号	大10・11	国	
九三号	大11・2	国	関口泰「国際補助語エスペラント」 同「憲法論に就て」
九四号	大11・3	国	
九五号	大11・4	国	
九六号	大11・5	国	関口泰「日本労働組合の国際加盟」
九七号	大11・6	国	
九八号	大11・7	国	関口泰「赤城日記より」
九九号	大11・8	国	
一〇〇号	大11・9	関・国	
一〇一号	大11・10	国	
一〇二号	大11・11	国	関口泰「燧ヶ嶽の初秋」
一〇三号	大11・12	国	関口泰「赤城山の冬」
一〇四号	大12・1	国・一	
一〇五号	大12・3	国・一	特別号「如何にして議会を改革すべきか」
一〇六号	大12・4	関・国・一	黙太郎「参謀総長の自決」「軍規弛緩の責任」「水平社運動」「水平社と国粋会」 関口泰「四十六議会の一特色」 瀬名黙太郎「ビエロ・デラ・フランチェスカ」
一〇七号	大12・5	国・一	関口泰「米国の国際司法裁判所加入と国際聯盟の改造(上)」 ST生「現内閣と 社会施設」

一〇八号	大12・6	関・国・一	関口泰「同前(中)」 瀬名黙太郎「マンテナアとジョバンニ・ペリニ」
一〇九号	大12・7	関・国・一	瀬名黙太郎「打破さるべき現状」「政府代表による非公式交渉」「呆れた政党」 「政治家の弁明といふもの」
一一〇号	大12・8	国・一	関口泰「同前(下)」 瀬名黙太郎「万葉集の恋歌」 黙「実行意志なき調査」「学 校長と学生とは師弟かどうか」「強暴犯罪激増の行賞」「坊主の厄介にならぬ葬式」
一一一号			
一二二号			
一二三号			
一二四号			
一一五号			
一一六号			
一一七号			
一一八号			
一一九号			
一二〇号			
一二一号	大15・3	関	関口泰「憲本妥協以後」 瀬名黙太郎「北欧南欧の美術」
一二二号			
一二三号	大15・4	関	
一二四号			

一二五号	大15・7	関	関口泰「若槻内閣の影薄し」
一二六号	大15・8	関	関口泰「怪文書、言論取締其他」 「十五周年記念号」とあり
一二七号	大15・10	関	関口泰「怪文書、言論取締其他」
一二八号	大15・11	関	関口泰「実験された普通選挙」
一二九号	大15・12	関	関口泰「労働農民党の分裂と社会民衆党の立場」
一三〇号	昭2・1	関	関口泰「政界歳の暮」 同「『ファッショ』の話」
一三一号	昭2・2	関	
一三二号			
一三三号			
一三四号	昭2・5	関・国・京	関口泰「内閣成立と新党樹立」
一三五号	昭2・6	関・京	関口泰「産業政策の上に立たぬ北海道拓植計画」 同「無産階級の迫るべき道に ついての論争」
一三六号	昭2・7	関・国・京	関口泰「無産政党側の立憲民政党評」 瀬名黙太郎「枢密院無用論その他」
一三七号	昭2・8	国・京	瀬名黙太郎「明治大正名作展の印象」
一三八号	昭2・9	関・国・京	瀬名黙太郎「時論としての人口問題」 関口泰「政友会の地租委譲論と政党の反対」
一三九号	昭2・10	国・京	
一四〇号	昭2・11	国・京	瀬名黙太郎「帝展素通りの記」
一四一号	昭2・12	関・国・京	関口泰「貴族院と枢密院の入替」

一四二号	昭3・1	国・京	関口泰「四つの無産政党大会」
一四三号	昭3・2	関・国・京	関口泰「府県会選挙の結果による衆議院選挙の予想」
一四四号	昭3・3	国・京	関口泰「総選挙の結果」
一四五号	昭3・4	関・国・京	関口泰「議会中心政治否認是非」
一四六号	昭3・5	関・国・京	
一四七号	昭3・6	国・京	関口泰「枢密院貴族院改革の一案」
一四八号	昭3・7	関・国・京	
一四九号	昭3・8	関・国・京	関口泰「治安維持法緊急勅令と枢密院問題に対する世評」
一五〇号	昭3・9	国・京	関口泰「床次第三党の評判」
一五一号	昭3・10	関・国・京	
一五二号	昭3・11	関・国・京	関口泰「中学改革案を評す」
一五三号	昭3・12	関・国・京	
一五四号	昭4・1	関・京	
一五五号	昭4・2	関・京	
一五六号	昭4・3	関・京	関口泰「田中内閣の断末魔」
一五七号	昭4・4	関・京	
一五八号	昭4・5	関・京	黙太郎「不戦条約問題」「拓殖省と朝鮮」

一五九号	昭4・6	関・京	黙太郎「内閣改造咄し」「両大学の学生騒擾事件」
一六〇号	昭4・7	関・京	黙太郎「田中内閣」「不戦条約の結果」関口泰「教育と政治」
一六一号	昭4・8	京	黙「十大政綱と三大調査会」「罌堂の非解散論」
一六二号	昭4・9	関・京	関口泰「教育費と軍費と恩給」
一六三号	昭4・10	関・京	黙「実行予算説明会」「売敷事件」
一六四号	昭4・11	京	黙「田中の後の大養」「疑獄と差止」
一六五号	昭4・12	京	黙「内閣改造から解散へ」
一六六号	昭5・1	京	
一六七号	昭5・2	京	
一六八号	昭5・3	京	関口泰「女子公民教育」
一六九号	昭5・4	京	
一七〇号	昭5・5	関・京	関口泰「特別議会開く」瀬名黙太郎「海軍当局と国防不安」
一七一号	昭5・6	関・京	
一七二号	昭5・7	京	関口泰「統帥権問題の見まわし」
一七三号	昭5・8	関・京	南千栄「関口泰さんの『公民教育の話』」
一七四号	昭5・9	関・京	
一七五号	昭5・10	関・京	

一七六号	昭5・11	関・京	瀨名黙太郎「ボツティチェリの芸術とダンテ神曲(上)」
一七七号	昭5・12	関・京	瀨名黙太郎「同前(下)」
一七八号	昭6・1	京	関口泰「浜口首相の容態」
一七九号	昭6・2	関・京	関口泰「首相臨時代理議會問答」
一八〇号	昭6・3	京	
一八一号	昭6・4	京	黙「無力なる絶対多数」 関口泰「鶴の話」
一八二号	昭6・5	関・京	黙「若槻さんと鱈」
一八三号	昭6・6	京	黙「官吏減俸の後始末」
一八四号	昭6・7	京	
一八五号	昭6・8	京	
一八六号	昭6・9	京	
一八七号	昭6・10	京	関口泰「満州事變の前と後」
一八八号	昭6・11	京	関口泰「学制改革のゆくえ」
一八九号	昭6・12	関・京	
一九〇号	昭7・1	京	
一九一号	昭7・2	関・京	関口泰「新しき官僚政治」
一九二号	昭7・3	関・京	黙「政友会の『大勝利』」

一九三号	昭7・4	京	黙「臨時議會終る」
一九四号	昭7・5	京	
一九五号	昭7・6	関・京	
一九六号	昭7・7	関・京	
一九七号	昭7・8	関・京	
一九八号	昭7・9	京	
一九九号	昭7・10	京	
二〇〇号	昭7・11	関・京	
二〇一号	昭7・12	関・京	
二〇二号	昭8・1	京	
二〇三号	昭8・2	京	
二〇四号	昭8・3	京	
二〇五号	昭8・4	京	
二〇六号	昭8・5	京	関口泰「病床の花」
二〇七号	昭8・6	京	関口泰「霧は立ちのぼる」
二〇八号	昭8・7	京	黙「何を裁断したのか」「軍服の濫用を怒る」 関口泰「京大問題と世論」
二〇九号	昭8・8	京	黙「脚の喜三郎」「警官と軍人」「非常時の用法」

二一〇号	昭8・9	京	黙「政党頭を出す」「鳩山の打撃率」 関口泰「歌の話補遺」
二一一号	昭8・10	関・京	黙「根本的の米穀対策」「政党への注文」
二一二号	昭8・11	関・京	黙「解散第一」「五相会議の成果」「外務省の人事刷新」 関口泰「橘曙覧の日記」
二一三号	昭8・11	京	黙「海軍予算の危機」
二一四号	昭9・1	関・京	黙「責任不問時代」「内閣会議の行衛」
二一五号	昭9・2	関・京	黙「政党盛り直すか」「荒木陸相退く」
二一六号	昭9・3	京	関口泰「浄智寺のこと(一)」
二一七号	昭9・4	京	黙「内閣居残り工作」「敗軍の将の軍語り」 関口泰「浄智寺のこと(二)」
二一八号	昭9・5	関・京	黙「ここに大穴あり」「政党の政策協定」
二一九号	昭9・6	関・京	黙「改変による政局安定」「建設の前の破壊」 関口泰「浄智寺のこと(三)」 関口泰「『名も無き民のころ』」
二二〇号	昭9・7	関・京	瀬名黙太郎「斉藤内閣の後に来るもの」 黙「枢密院の内容変改」「改正選挙法の活用」 関口泰「浄智寺のこと(四)」
二二一号	昭9・8	関・京	黙「新官僚の本体」「考慮内閣の感」 関口泰「農民道場の理論と実際」「浄智寺のこと(五)」
二二二号	昭9・9	京	黙「在満機関の問題」「血盟団の求刑」 関口泰「政民両党の教育改革案」
二二三号	昭9・10	関・京	黙「臨時議会召集」「華族界異変」 関口泰「八幡さまと天神さま」
二二四号	昭9・11	関・京	黙「現内閣の人事」「帝展の審査」 瀬名黙太郎「陸軍パンフレットの評の評」
二二五号	昭9・12	関・京	黙「高橋蔵相再出馬」「血盟団と小川元鉄相」 関口泰「浄智寺拾遺」
二二六号	昭10・1	関・京	黙「解散はあるかないか」「政友会の自壊を待つ」 関口泰「夢窓国師と庭園」

二二七号	昭10・2	関・京	黙「人権宣言」「首相とは何か」
二二八号	昭10・3	京	黙「貴族院の開店休業」 関口泰「改正選挙法の諸問題(上)」
二二九号	昭10・4	関・京	黙「非常時内閣の予想」「議会の論理・心理・倫理」 関口泰「憲法学説抜書」
二三〇号	昭10・5	京	黙「からの郷倉」「少年血盟団」 関口泰「帝国議会と帝国大学」
二三一号	昭10・6	京	黙「内閣審議会と選挙粛正」 関口泰「選挙粛正と改正選挙法」
二三二号	昭10・7	関・京	黙「神聖選挙聯盟」「重臣ブロック排撃」 関口泰「地方選挙の改正諸点」
二三三号	昭10・8	関・京	黙「国体明徴と機関説」「陸軍の統制強化」
二三四号	昭10・9	関・京	黙「林陸相の辞職」「内閣審議会と文政審議会」
二三五号	昭10・10	関・国・京	黙「国体明徴の洪大無辺性」「地方選挙の結果」
二三六号	昭10・11	関・国・京	黙「大演習と政局」「審議会の整理」
二三七号	昭10・12	関・国・京	
二三八号	昭11・1	国・京	黙「官僚か政党か」
二三九号	昭11・2	国・京	黙「総選挙の結果」「岡田内閣の後に来るもの」
二四〇号	昭11・3	関・国・京	
二四一号	昭11・4	関・国・京	黙「革新は出来るか」
二四二号	昭11・5	関・国・京	
二四三号	昭11・6	関・国・京	関口泰「花の色々―法師温泉紀行」

二四四号	昭11・7	関・国・京	黙「国策の氾濫か政治の貧困か」「会計年度を歴年にする事」
二四五号	昭11・8	関・国・京	黙「議院改革の前途」「生命保険の国営」
二四六号	昭11・9	国・京	黙「行政機構改革の忘却」 関口泰「華族の血統と教育」
二四七号	昭11・10	関・国・京	
二四八号	昭11・11	関・国・京	黙「政党の腰起つか」「教育自活の問題」 関口泰「選挙法改正の眼目」
二四九号	昭11・12	国・京	黙「議会制度懇談会」 瀬名黙太郎「戦争解説書の効果」
二五〇号	昭12・1	関・国・京	黙「不勲功華族の処分」 関口泰「七十議会の展望」
二五一号	昭12・2	関・国・京	黙「林内閣成立」 金森徳次郎「関口泰君の『時局政治学』を読む」
二五二号	昭12・3	関・国・京	黙「独特の憲法の急所」「選挙を嫌う政党」
二五三号	昭12・4	関・国・京	黙「第七十議会の解散」「新党の性格」 関口泰「浄智寺物語(上)」
二五四号	昭12・5	関・国・京	総「選挙から総辞職へ」「内閣企画庁と中央経済会議」「浄智寺物語(中)」
二五五号	昭12・6	関・国・京	黙「近衛内閣の印象」「企画庁総裁の問題」「浄智寺物語(下)」
二五六号	昭12・7	関・国・京	黙「革新政治の一步」「近衛首相の談話」
二五七号	昭12・8	関・国・京	関口泰「天野教授の『道理の感覚』」
二五八号	昭12・9	関・国・京	
二五九号	昭12・10	関・国・京	
二六〇号	昭12・11	関・国・京	黙「内閣参議と文相更迭」

二六一号	昭12・12	関・京	
二六二号	昭13・1	関・京	黙「近衛内閣は強化されたか」「教育審議会の使命」
二六三号	昭13・2・3	関・京	
二六四号	昭13・4	関・京	関口泰「大久保内務卿の手簡」
二六五号	昭13・5	関・京	関口泰「反古の中から」
二六六号	昭13・6	関・京	関口泰「続反古の中から」
二六七号	昭13・7	関・京	
二六八号	昭13・8	関・京	
二六九号	昭13・9	関・京	関口泰「前島密男の東海道路交通計画書」
二七〇号	昭13・10	関・京	関口泰「懸六石と吉田駒次郎」
二七一号	昭13・11	京	
二七二号	昭13・12	関・京	関口泰「金太郎（堀井梁歩）の楽書」
二七三号	昭14・1	関・京	
二七四号	昭14・2	関・京	
二七五号	昭14・3	関・京	
二七六号	昭14・4	関・京	
二七七号	昭14・5	関・京	

二七八号	昭14・6	関・京	関口泰「堀井君の手紙」
二七九号	昭14・7	関・京	関口泰「堀井梁歩の手紙」
二八〇号	昭14・8	関・京	
二八一号	昭14・9	関・京	関口泰「『日本二千六百年史』」
二八二号	昭14・10	関・京	瀬名黙太郎「阿部内閣の評判其の他」
二八三号	昭14・11	関・京	瀬名黙太郎「外務省騒動の責任」
二八四号	昭14・12	関・京	瀬名黙太郎「町田総裁入閣拒絶の意味」 関口泰「『後鳥羽院』」
二八五号	昭15・1	関・京	瀬名黙太郎「辻博士の『単色燈』」 関口泰「関口氏の研究」
二八六号	昭15・2	関・京	関口泰「高千穂峯真偽弁」
二八七号	昭15・3	関・京	瀬名黙太郎「笠森伝繁君の『満州開拓農村』」 関口泰「高千穂の正月」
二八八号	昭15・4	関・京	
二八九号	昭15・5	関・京	関口泰「『支那言論史論』」
二九〇号	昭15・6	関・京	
二九一号	昭15・7	関・京	
二九二号	昭15・8	関・京	
二九三号	昭15・10	関・京	
二九四号	昭15・11	関・京	

二九五号	昭15・12	関・京	
二九六号	昭16・2	関	
二九七号	昭16・3	関	関口泰「関口氏の研究続篇」

附記

『社会及国家』のバック・ナンバーの閲覧・複写にあたってさまざまな便宜をおかり頂いた関口益さん、国会

図書館・京都大学経済学部図書館、一橋大学図書館ならびに法政大学図書館の関係の方がたの御好意に深く感謝の意を表したい。